

「背泳ぎのように浮かんだ」

(大通 70代 女性)

大通の2階住まいの自宅で地震。外に出ると揺れで車が飛び跳ねていた。避難しようとダウンジャケットを着て外に出た。防災放送もサイレンも聞こえず、逃げようと思った時、消防団の呼びかけだけが聞こえた。

側溝から黒い水が噴き出し、三浦米穀店の方向に黒い波が見えた。あつと言う間だった。宮古駅の方に向かい右に行こうと思ったら波にさらわれ、セントラルホテル熊安の駐車場の広くなった所が海になった。

流れてきたタイヤにつかまったが、何回か水を飲んだ。タイヤは重くて一人でつかまっても沈んでしまうので、手足を動かして泳いだ。あちこちの2階にいる避難者に呼ばれたが、いくら泳いでも中心に戻されるようで近寄れなかった。泳ぐけど、泳げない。「あまり動くと疲れるから動かずに救助を待った方がいい」とも言われたが、ここに救助が来るわけがないと思っていた。

しばらくうつ伏せで泳ぎ疲れたので、背泳ぎのように浮かんだ。ヘリコプターがいっぱい飛んでいた。暗くなって声を掛ける人も無くなり、星が見えた。波が穏やかになり、自宅の方に静かに泳いで行ってみた。その時、自分の家の前で死ぬのは嫌だと思い、ようやく家に上がる階段にたどりついた。

寒くてガクガク震え、このままだと死ぬかと思ったが、以前もらったホッカイロがあったので体のあちこちに貼り付けて、布団にくるまった。時計を見たら20時40分、水が引いたのは20時頃だったのかよく分からないが、体が温まってきて寝ることができた。

次の日、迎えに来た盛岡の娘夫婦の所に2週間程避難した。2日目に風呂に入ったら波の水圧のせいか、前半身内出血で真っ黒だった。津波の水を何度も飲んだからだろうか、宮古に戻り片づけをしているうちに吐き気がしてきた。海水を飲んだ人は、点滴をするらしいが知らなかった。胃にピロリ菌がいると言われ、今でも薬を飲んでいる。

地震の後、まさか自宅に津波が来るとは思っていなかった。放送が聞こえなかったが、異常な地震だと思い宮古小学校に逃げようと思った矢先の出来事だった。

泳げない人は無理、死んだと思う。週2、3回プールに通っており、水

が怖くなかったので落ち着いて判断できたと思う。着衣水泳体験には参加できなかったが、疲れたら仰向けになればいいと教えてもらっていた。仰向けになって、流れてくるもの（ペットボトルでもいい）を待てばいいと。水の中だと寒さを感じなかった。冬なのでダウンを着て逃げたが、あれも良かったのかもしれない。死ぬ人と生きる人の境がわかったような気がする。ちょっとの差だった。

暗くなって誰からも見えなくなって声が掛からなくなって寂しくなったときに、ほんとに一人だと思った。近くのビル5階の窓から誰だか分からないけど、白い布を振って「暗くなってもあきらめてはダメだ!一人なんだから生きることを考えろ」と声を掛けられてそれが力になった。



「お菓子は喉が渇く」

(津軽石 80代 女性)

向町福祉施設で地震。建物は丈夫なので上の階に避難したが、まわりは全部水で一時孤立した状態になった。

施設には保存食がなかったが、パンなどを置いてくれた人がいたので、皆でいただいた。そこでは、ペットボトルの水を3人で分けた。施設に泊っている人からも、お菓子を分けていただいてありがたかったが、食べた喉が渇いて困った。災害時は、味の濃いものばかりだと水分が必要になり、逆に大変なことがわかった。

「命は紙一重」

(津軽石 60代 女性)

茂市のコンビニ駐車場で乗車中に地震。放送で津波が来ると聞こえた。そしてバツン！と電気が消えたので、すぐに津軽石の自宅に向かい走り出した。花原市と根市の間の国道の山が川岸の方に崩れた。盛岡方面に向かう車線は渋滞していた。小山田のトンネルをくぐって、木材工場の通路を通り、ホームセンターのところで同乗者をおろした。

藤の川から高浜に下るときに海を見た。水は引いていなかったが、大きな渦が2つ巻いているのが見えた。油など汚い水。養殖棚が持ち上がっていた。ガソリンスタンドや道路にも人がいた

高浜小学校のところでも海を見た。防波堤には消防団員もいた。校庭にもたくさん避難者がいた。金浜の海もまだ引いていなかった。まだ大丈夫だと思い、津軽石の自宅を目指して一気に走った。途中の金浜防波堤にも人が歩いていたり、法之脇にも数名いた。

金浜の温泉施設には煌々と電気がついていて、車が30台近く止まっていた。自家発電だったようだ。無事に自宅に着くと近所の男の子が、ワンセグで仙台空港が流されているのを見せてくれた。また、望遠鏡で見た方からは、法之脇を水が超えたと聞いた。ヘリがどんどん来ていた。

道々、歩いている人や堤防の上で様子を見ている人が居たが、皆ダメだったと思う。やっぱり携帯は必要だし、消防団には救命胴衣を着用させたい。救急車やパトカーにも救命胴衣を積んでいけばいいと思う。また、メガホンも皆が持てば大きく聞こえる。

チリ地震の時には中1で、宮古湾の底が全部見えて葛飾北斎の絵のような波が来た。その時は出崎に渦が巻いていて、流れた家はその渦のところで沈んでいった。その後、堤防が出来て「次に大きな津波が来たら、たらいのようになるよ」と言っていたとおおり、なかなか水が引かなかった。

今回、自分は助かったが、命は紙一重だと本当に思う。



「水が来た！と言われて逃げた」

(大通 女性)

末広町の美容院で地震。髪が濡れたまま帽子をかぶり、急いで自転車で大通の自宅に戻った。商店街の店員さん達は、全員一列で道路の真ん中に並ぶように立っていた。

家にいる犬が心配だったし、まさか津波が来るとは知らず家まで戻った。とりあえず大事な物をバッグにつめ、犬の餌を持って宮古小学校へと思ったが、あたりは避難する様子がなかったので玄関にいた。たまたま信号の方から走ってきた奥さんが「そこまで水が来ている！」と言ったため、ビックリして犬を引っ張って走った。

黒田町にさしかかる辺りで寿司屋の近くの川が気になって見たら、川が盛り上がり幅が狭く感じた。これが津波なんだ！と横切った。後ろの人はもう濡れていた。油断したら私も濡れていた。水はあっという間に横町の3分団の方へ流れ、宮古小学校の校庭までまわって来ていた。学校の前の魚菜市場に通じる道路は腰まで水があり、道路の水を漕いでくる人もいた。その後、息子が迎えに来て夫のいる会社に4、5日避難。

3月30日、電気がついた晩から自宅2階で生活。一切避難所に行かないので物資はなかった。電話の復旧は遅く、7月25日までは携帯だけ。あの時は走るのに夢中で放送を聞いてない。水が来た！と言われてたので逃げた。自宅近くの医師が閉伊川まで400mと言っていたが、解体が進むと家から橋が見えて、本当に川に近いのだと改めて感じた。



「のんびり自転車で帰った」

(長根 女性)

中央公民館分館で活動中に地震。生まれて初めての大きな揺れだった。いつにない揺れだったが、防災放送は聞いていない。今までは小さい揺れでも放送があったのに、その日は何もなかった。のんびり自転車で千徳方面の自宅へ帰った。当然、津波の襲来は知らず、近所の人と立ち話などもしていた。次の日、すごいことになっていると聞いて唾然。蛸の浜の姉夫婦は避難していたが、すぐ帰るからと普段着で何も持たないで逃げたそう。いつもの通りの自宅に戻れる避難だと。

自宅に帰って停電だとわかった。帰る途中は車も普通に走っていた。警報も何もなかった。肝心な時に放送が無いと思った。



「情報がないのが一番つらい」

(河南 女性)

宮古短期大学近くの自宅に一人いて地震。地震は大きかったが、津波が来たのはわからなかった。近所も慌てた様子はなかった。しかし、夕方暗くなっても小学校6年生の孫が帰って来ない。電話も通じない。夜になっても娘と連絡がとれない。情報も入って来ない。

何が起きたのか分からずろうそくの灯りの中、一人一人の家族のことを考え、夜も寝られなかった。午前3時頃「ばあちゃん元気ですか？」と娘の声がして、孫を連れて帰ってきた。「何かあったの？」と訊ねて、大変なことが起きている事がわかった。その晩から、情報は娘からのみ。娘も職場から3日は戻れなかった。

私と孫と二人だけで暮らした。水がなく、電気もつかない。孫は沢水が飲めると友達から聞いたらしく、ペットボトルで汲んできてくれた。退院したばかりでアパート住いをしている息子は、建物が被災したため、自宅から片づけに通っていた。自分が被害を受けたわけではないが、忘れられない大きな出来事だった。情報がなかったのが一番つらかった。

「訓練は訓練、自分が逃げる所は決めていよう」

(日立浜 女性)

常に毎年避難訓練している角力浜(すもうはま)地区に住んでいる。「訓練は訓練だよ、自分が逃げる所はきちんと決めていましょうね」と言っていた。地震の日は、自宅に帰ったばかりでテレビをつけたらグラグラっときた。1回か2回放送があってその後なくなった。津波が来ると思い訓練のつもりで避難した。

見ていたらすごい波。竜神崎の灯台が倒れるところも家が流されるのも見ているよりしょうがない。すごい波の音だった。自分の家にも網などが出たり入ったりしていた。

高台にあるパークホテルに200人ぐらい避難した。とても良くしてもらったが、指定の避難所ではないので行政の目が届かなかった。連絡もつかない。会長と民生委員で14日の夜8時に市役所に行ってみたが、すごいことになっていた。前に船があった。ホテルからお米さえあれば炊きますからと言っていただき、自分達でおにぎりも作って食べた。人の有りがたさを感じた。

2、3年も避難訓練ばかりすると思っていたが、お陰で今回は犠牲者なし。普段の訓練で意識付けが出来ていた。1人亡くなったが船を見に行っただけで家に居れば亡くならなかった。高齢者も多いので、これから避難所を多く作るべきだと思う。

人のありがたみとか色々勉強させてもらった。支援物資もセンターを通すと遅いからと、直接持ってきてくれた方もあった。歩けないお年寄りもいたが、ちょうどデイサービスに行っていて助かった。もし家で見ていたら、置いていけなかっただろうと思う。今後は避難路も考えなければならぬ。



「命はめいめいこ」

(磯鶏 女性)

磯鶏駅前の自宅で地震。変な揺れで気持ちが悪かった。息子と二人で国道45号線沿いの山へ逃げた。山の前が崩れてパトカーが2台来ていた。町内では、「八木沢に行く道路の石崎鼻石屋の横の高台へ避難する」と決まっていたので、上がって行ったが、地震で木が倒れてくるような気がした。パトカーが来て、「ここは崩れるから小学校に行って」と言われ、八木沢の方のトンネルの高いところに移った。

一旦避難した息子は田野畑にいる祖母に連絡しようと一度家に戻ってしまった。再び、避難のため家から出ると、近所のおばあさんが「私も一緒に行く」と後を歩いてきていた。私が上から見ていたら、その2人の横を黒いヘドロが音も無しにワッと襲って来た感じだった。「津波だよ！」と騒いだ。息子は急いでおばあさんをひっぱりながら、少し走って道路に上がったが、同時に2人とも波に流されて全く見えなくなった。騒いでも聞こえない。民宿のフェンスに誰かの手が見え、それが息子の手だった。やっと助かったが、一緒にいた近所のおばあさんは亡くなった。

息子は泳いで道路に渡ってきた。足はすごい傷で、今も残っている。裏山の竹やぶをかきわけ20人ぐらいで小学校へ避難。1か月半ぐらいいた。私は波が分かったので、息子とおばあさんに「早く逃げて」と言ったが全然聞こえていなかった。避難所では皆さんに「命はめいめいこ、自分を先に守ったほうがいいんだよ」と言われた。息子は助かったが、今でも近所のおばあさんに悪いなと思う。

警報は1回ぐらいは聞いた気がする。その後は逃げるのに必死で初めて見る津波にびっくりしていた。最初だけ携帯が通じたが、災害伝言ダイヤルもダメ、公衆電話も。消防の緊急電話も行くのが大変だった。



「食器棚の留め具をはずしていた」

(崎鍬ヶ崎 60代 女性)

2時のバスで崎鍬ヶ崎の自宅に帰り5分ぐらいで地震。一緒にいたお客の携帯の警報が鳴ってから揺れた。その後テレビの情報から「大きい津波が来るよ」とそのお客は帰った。私もガスやテレビを止め、孫を連れて外へ出た。

自宅は田んぼに建っているのですごく揺れて、ダメかなと思った。いつもは食器棚の留め具を止めていたが、孫のおやつにコップを出したまま止めていなかったため、3つぐらい落ちていた。幸い怪我はなかった。水の汲み置きは用意した。海岸の様子はわからない。ろうそくや反射式ストーブを出した。石油を満タンに入れていて良かった。

子どもたちは余震を怖がった。情報は入ってこず、市役所に水が入ったとか、人づてで聞くだけ。末広町までいったというのも誰かの情報。水は、近所の沢水から汲み取った。飲む水は細いながらもまだ水道が出たので、溜めることが出来た。山だから津波が来ない分良かったが、家には10日経ってから水道が出るのと同時に給水車が来た。



「また戻れると思いついて行った」

(藤原 70代 女性)

藤原で集まりに参加した後、藤原三丁目の知人宅に向かい、黒田歯科まで行った所で地震にあつて戻った。家に戻るにも地面がもこもこして大変だった。玄関で夫が持ち出しリュックをしょってカギをかけていたので、また戻れると思ひ何も持たずについて行くだけだった。

夫は、揺れが強いため「これでは大変だ、津波が来る」と思ひ、以前から地震の訓練で準備をしていたリュックに物を詰め、逃げる準備をしていたようだ。

自宅近くの線路に上がったら何分もたたないうちに「水が来た」と後の方が言うので、何も見ずに上の方のお宅に一晩泊まった。

全然放送も聞かず、波も見ない。翌日、がれきで自宅に行けないので一緒にいた三夫婦で学校に避難した。35日間、藤原小学校に居たが、市役所担当職員が1週間ごとに変わるたび名前、住所を聞かれたりした。避難所では水には不自由しなかった。避難所はありがたかった。食べるものは次の日からおにぎり1個ずつ配られた。夢のような感じ。何回も避難訓練はしていたけど、また戻れると思つて何も持たなかった。すっかりみんな流された。



「水が来たが！来んな！」

(藤の川 60代 女性)

築地にある中央公民館で活動中地震。揺れが落ち着いた頃、帰ろうと坂を下りた所で、「水が来たが来んな！」あの一言で無意識に坂を戻った。振り返って見た、市役所の両側とグリーン車が記憶にある。車は歩道橋の鉄柱にひっかかった。弟の会社の車の色に似ているから心配だった。坂を上がるにも気になった。宮古市役所前郵便局の上の窓までも水が来て。消防団の人に「第二中学校が避難所です」と言われ、皆で行った。避難所では夕方まで帰るなと言われた。津波警報は解除になっていないので一晩ガマンして泊った。藤の川の自宅は高い所なので無事だった。

翌日、小山田トンネルを歩き、木材工場の裏を通ったら、国道沿いのドラッグストアの物が水産高校の校庭に流されていた。商業高校まで歩くと、ホームセンター入口の国道45号線は右も左もダメ。刈屋商店前の国道の真ん中に大きな家がどかんと立っていた。周辺にはパトカーが2台突っ込んでいて、がれきだらけ。

下に下がればシーサイドホテルもがれきで、あのぐらい泣いて歩いたことはない。その後、何度か市役所の写真や津波の映像などを見てショックで気が変になり、薬を飲んでいる。急性ストレスの症状だそうだ。



「皆同じが安心に」

(日立浜 70代 女性)

築地の中央公民館で活動中に地震。日立浜の自宅にそのまま帰っていたら危なかった。避難した第二中学校から千徳の娘のところに2, 3日移ったが、日立浜の人達がパークホテルに避難していると聞いたので、そのまま1ヵ月ホテルでの避難生活を送った。日立浜の町内の人達といるのが良かった。知っている人、同じ境遇の人で安心して夜も寝られた。

そこから自宅に通って片づけ。自衛隊が有り難かった。1ヵ月ホテルに居て、その後総合体育館に移ったが8月1日に出て、今は娘のななめ向かいのアパートに居る。今頃になってから不安になる。目が覚めると津波のことが異常に思い出される。うつになる人もあると聞く。我が家は2階の3分の2まで水が入った。娘の所に居た2, 3日は情報が入らずとても不安だったが、避難所にいれば情報が入るし、知っている人と一緒に安心した。皆同じなので安心。避難所でないと情報もわからないので、一人残る人もいたようだ。



「津波来るぞ！逃げるべし！」

(藤原 70代 女性)

藤原の自宅1階で地震。夫は2階にいた。今迄にない揺れで夫は降りて来られなかった。私は2階が崩れるかなと思い、2階部分がない方に行っただまって座っていた。少し落ち着いてから夫が「こんな地震今迄にないから、津波来るぞ！ 逃げるべし！」と言った。ラジオで津波が来ると聞いて道路に出て、いつものとおり避難するべしと向かいの旦那さんにも声掛けして一緒に逃げた。

藤原地区は皆避難カバンを用意している。藤原比古神社に上がった。消防の人も集まって、助けたり引き上げたりしていた。

避難して10分も経たないうちに波を見た。重茂から白浜から湾から押ししてくる。波ではない、黒くてでっかい山。山の移動。湾から岸壁まで山が3つだけ。押ししてくる大きな波で道路はすべて川になった。自動車や発泡スチロールは同じ速さで流れる。

山の上だから情報も入らないし、食べ物も心配だったが、近所の40～50代の方々が家からお米を持ちより、おにぎりなど炊き出しをしてくれた。炊きたてをラップに包んでもらい、とても美味しかった。若いお母さん達の力にありがたいと思った。湧水もあり、神社の行事で使う大きい釜があったのでガスで炊いた。

一番不安なのが役所からの情報がないこと。携帯もつながらない。若い方がツイッターで連絡をとってくれた。若い人はありがたい、勇気づけられた。訓練に普段は参加しない人も、地震があんまり大きすぎたので皆出てきた。大津波警報は聞こえなかったが、ラジオで6mの津波が来たとだけ聞いた。(警報聞こえない)「役所は何しているんだろう、連絡はないし」と言っていたが、役所の自家発電もダメだったんだね。あれが一番困った。

次の朝早く、津波警報解除にならなかったが自宅に出かけた。道路も丸太やヘドロでドロドロ。歩いて避難所と自宅を往復した。北海道から孫と息子が迎えに来たので、1ヵ月以上避難してきた。嫁は青年海外協力隊に行ったことがあり、いろいろ気がついて全部積んできてくれた。

昔の人はすごい。津波がくると体験でわかっているの、高い所が一番と言う。絶対に戻るなとも言われた。消防の人達も言っていた。

「一番水で困った」

(佐原 70代 女性)

築地の中央公民館で活動中に地震。仲間二人と第二中学校に避難した。そこにいれば情報が早いので、2人の仲間を残し佐原の自宅に戻った。「水が止まるから水を用意しておけ」と言われ、水を汲んだ。朝6時半までは水が出た。風呂までは気が付かなかったが、次の朝に下の家で水が出ているから汲んだ方が良いと言われ、一人で頑張って運んだ。放送はなかったと思う。

佐原では、水が3週間出なかった。トイレも大変で、水の配達をした。給水車の故障で、中学校まで汲みに行かなければならなくなり、水で一番困った。ガスがない時も、反射ストーブがあり良かった。

私はこのくらいで済んだが、情報がないのと水で困った。



「世の中の進んだものがストップした」

(長根 70代 女性)

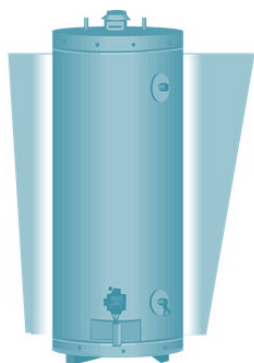
長根の自宅で地震。直接津波は受けていない。停電になると情報が入らないと思い、携帯電話を見たらNHKの女性アナウンサーが「お風呂に水を早く溜めて」と言うので、駆け足で風呂に行き、水はしばらく出たのでいっぱい溜めた。

2日分は間にあった。温水器のタンクで1週間は持つと思ったら、蛇口をひねっても一滴も落ちない。油断したが、電気が切れると出ない仕組みだった。水洗トイレも機能が良いものだったが、電気がないと水も出ず、排水もしない。日本の優れた機能が全部0になるところがみじめに思った。携帯電話も1カ月ぐらい通じなかった。世の中の進んだもの、ライフラインがストップしたことが身にしみて残念だった。

ラジオで避難者の様子が色々伝えられた。避難所では「おにぎり1個をやっともらった」と言うので、私もその心境になってしまい、やはり食べるものも食べなかったし、反射式ストーブもあったが、余震が多いので使わずに震えていた。

自宅に電気がつくまで、2日間じっとして外に出なかった。世の中がストップ、タイムスリップしたようだった。市役所の放送も聞こえず、世の中との縁が切れた感じで、情報はラジオだけだった。

実際に見るまでは、一部落が壊滅したというのも信用できず、3日後ぐらいに市役所の歩道橋に立って街を見た。あの無残な姿。被災地を見て本当に津波ってこうなんだと泣いた。



「3台あったラジオは使えず」

(長根 80代 女性)

自宅で地震。夫と二人で居た。揺れが落ち着くまでは戸につかまっていた。近所の様子は全然わからなかった。電気が止まったが、風呂に水を汲んであったので良かった。

反射式ストーブもあった。ガスは怖くて使えなかった。ラジオが3台もあったが、電池の予備はありながら、どれも使えなかった。何年も使っておらず、手入れもしていなかったためだ。結局、近所からラジオを借りて情報を聞いたが、警報は全然わからなかった。

食べ物は特に不自由はなかったが、水が出ないのが大変だった。



「いつも小さい電燈を持っていた」

(津軽石 80代 女性)

入院のため、1月から行っていた仙台の娘の家で地震。中学生の男孫と二人でいた。「わー地震だ、テーブルの下に入れ！」と孫にいばって号令をかけた。

また揺れる。物がぼろぼろ落ちてくる。3回目ぐらいがすごかった。落ち着いた頃、毛布を持ってきて寒さをしのいでいたら娘達が帰ってきた。宮古にも帰られず情報もなかった。

こちらより先に長野の親戚が宮古の情報を知り、「宮古が大変だ、全滅だ」と心配していたようだ。そのうち私が仙台にいるのがわかって安心した。

宮古に帰りたいが帰られない。音信不通。ガソリンが無いので車で送ってもらったとしても帰られなくなる。仕方がないので4月まで仙台にいた。仙台も物が無く大変だった。娘達は公務員なので物資を配布しなければならず、私と孫だけが家に残った。

4月に宮古に帰って来た時、磯鶏の様子を見た瞬間言葉も無かった。友人の家の前も、ものすごいがれき。自宅もつぶれているだろうなと思ったが、山の方なので津波は来ていなかった。揺れの被害も少なかった。

家のカギを開ける時に、暗いと困るのでいつも小さい電燈を持ち歩いていたが、仙台でもとても役にたった。停電でも、トイレなど夜中に起きても使えるのでこれは大事だと思った。



「何かあったら来て頂戴ね」

(泉町 80代 女性)

一人暮らしの泉町自宅地震。怖くてつかまっていたが、途中で表に出て「怖いね、どうしよう」と向かいの人と2人で抱き合っていた。隣の若い奥さんが「もう大丈夫だ」と言うので、落ち着いてから家に入ったら、お勝手の物、戸棚の物、人形ケースも皆落ちていた。暗くなり丹前をかぶっていたら、ヘルパーさんが迎えに来てくれ、車で山口公民館に避難した。二晩避難の後、電気と水がきた娘の家に二晩泊った。

妹は築地で、逃げる途中で自転車ごと波に押し流されたそう。「なぜ波が来る前に逃げなかったの」と聞いたが、「そこまで考えなかった」と言っていた。市役所で車が流れるのを見てから逃げたそう。私は、「それでは遅いんだよ」と言った。

妹の旦那も一緒に逃げたものと思ったが、自宅2階に残ったままで一晩いたようだ。息子が見にいったら、2階で震えていたという。歩けないので自衛隊に助けられ、第2中学校に避難した。

千鶏の実家が流されたのが後で分かった。兄夫婦とお婿さんも流されて亡くなった。知らされたのは、4、5日後で、あそこまでは来ないと思っていたので、ショックで2、3ヵ月も頭から離れなかった。今でも目が覚めると思い出し、津波のことを思うと涙が出る。

私は、「いつも一人だから何かおこったら来て頂戴ね」とヘルパーさんに言っている。後で山口川を見たら、家の下あたりまで来ていたようだ。船も来ていた。波は川を来るといふ。ヘルパーさんに来てもらって本当に助かった。



「タオル1本、新聞紙のありがたさ」

(津軽石 80代 女性)

お昼休みで家族4人津軽石駅前の自宅にいた。1回目の地震でこれは大変だとすぐカギをかけ、貴重品を持ち車に2人ずつ乗って近くの高い山に逃げた。そこは指定避難所ではなく、山には道が無いため、物資を運ぶ消防団にも難儀をかけ後悔した。それにいくら近くの山と言っても、海に向かう道を通ったので危険だった。その晩は車にいたが、長靴に厚めの靴下で良かった。沢水もあったし、次の日に部落の人がジャガイモを炊いてくれた。

タオル、新聞がありがたかった。タオルを1本みつけ、ふたつ折りにして、わずかなお湯で顔を洗った。裏でお父さん、ひっくり返してお母さん、また裏返して孫など繰り返し使った。それが4、5日続いた。

新聞紙は座布団にもなる。寒いと前にもかける、何かを包み、風呂敷にもなる。新聞とタオルのありがたさ。ろうそくも常にしまっておくと良い。電池も詰め替える事が大事。ガソリンも以前は無くなってから入っていたが、日にちを決め、あるうちに入ればこういう時に良い。おにぎり1個のありがたさもわかった。

避難所にいないため、2日目には親戚に死んだと思われた。後日、がれきを越えて学校に向かった。本当に皆さんに助けられた。物は大切にしなければならぬし、準備をしておくべき。タオル1本のありがたさ。



「昭和 8 年の津波」

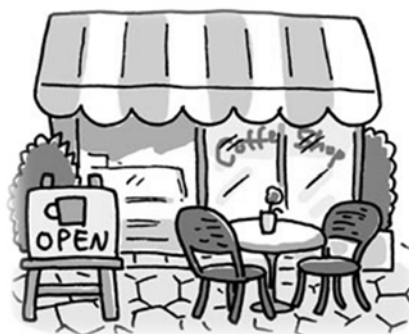
(小山田 80 代 女性)

地震の時、栄町の商業施設 1 階にいた。いつもと違う揺れだなーと思っているうちに電気が消えたので、レジも置いて外に出て皆さんと様子を見ていた。末広町の方から「津波が来たー！」と声が聞こえたので、一石山のほうに逃げた。店員も 10 名ぐらいいた。

ある家の前に休んでいたら、その方が椅子とストーブを出してくださり、本当にありがたかった。まさか、あのような大きな津波とは思わず、降りてきてびっくりした。山口川をみたら、道路すれすれまで水がきていた。

山口地区に住む弟の家で一晩泊まり、翌日町を見てみたら船は横たわり、車の上に車が乗ってまあすごかった。あんな町中に。

昭和 8 年の津波の時は、小学校 1 年ぐらいで「津波だーっ！」と本町の方を走って逃げ、常安寺に行ったものだ。今回はその本町も、店舗の前までかなりの水が来て奥の方まで入った。小山田の自宅は無事だったが、停電で商売も出来ず、とりあえずはおにぎり作りを役にした。ボランティアが来てくれたおかげで、1 週間 10 日で町は日増しに見違えるようになりびっくりした。本当に助かった。



「意識が高くなっている」

(栄町 80代 女性)

保久田にある中央公民館分館で活動中に地震。おろおろして机の下にもぐった。やや落ち着いた頃、「前の公園に避難してください」と言われた。少し待った後に帰宅。全然危機感がなく、自宅に戻ると近所の方に「どこに行ってきたの、早く早く！家の鍵もかかってないし、悪いけど中に入ったら、棚から物が落ちていたようだよ。」と言われた。のんびりと入り、台所のコップや2階を少し片づけていると、西ヶ丘から嫁が心配して来てくれた。

今になって考えても、あの時放送を聞いたかどうか定かでない。嫁が、どこで見たか聞いたか「近くを津波が越してる！水があふれれば家に入るので避難しましょう」と言うので、リュックをしょって隣の車で一緒に一石山の下の所に避難した。夕方、山口小学校に嫁と避難。その晩毛布が2人で1枚支給。翌朝10時過ぎにおにぎりが届いた。

昔のアイオン台風と比較すると、皆さん整然と並び、「ここで終わりです」と言っても後の人が不平も言わず、黙って戻る。昔は先にもらった人が後に並んでまたもらうこともあったが、そんな事は全然なく、皆さんの意識が高くなっているんだなと思った。一旦家に帰って、幸いあった反射式ストーブで暖をとり夜まで居たものの、水道、電気もないので、また山口小学校に行って泊った。家にいると心細いが、余震が来ても皆とすれば少し安心だった。小学校は、なぜかトイレの水が切れなかった。手洗い水もザーザー出た。自宅の水道はちょぼちょぼで困った。

実際、町がそんな災難にあっているとは思わなかった。息子から「すごいことになっている」といくら聞いてもピンとこない。そういうことがあるだろうか。1週間後に、新川町の実家と藤原、磯鶏の親戚を訪ねようとしたが、あのがれきにびっくりした。裏道を歩いて保健センターの方まで行ったが、泥でズブズブ。後は恐れをなして、家でおにぎりを作り届けるという程度の支援しかできなかった。



「45号線を越える波はないもんだ」

(磯鷄沖 70代 女性)

磯鷄公民館で卓球中に地震。これは危ないと、孫がいる近くの自宅に帰ったら「大津波が来るってよ、ばあば。分団の人も逃げなさいと回っていたから逃げなきゃ駄目だよ！」と言われた。しかし、以前から「なあと国道45号線を越える波はないものだ」と思っていて、それがいつまでもいつまでも頭に残っていた。それで全然慌てることもなく、孫と着の身着のまま、コートもなく、タクシーで磯鷄小学校に行った。

途中、上村の高台にある修導場の前で皆さんが下を見ているのがわかった。もう波がきていた。材木も一緒に流れて。だからほんとに2、3分のところで水を踏んだかもしれない。孫の一声で逃げた。

磯鷄小学校が避難所で、着るものもなく、ガクガク震えて大変だった。午後11時頃に小さいコップでさ湯が回ったので一息ついた。12時すぎに食パンの半分が配布された。その後、修導場が暖かいからと招かれ、10日ばかりお世話になった。座布団もストーブもあるし、上村の婦人部がじゃがいも、米を持ちより炊き出ししてくれていた。

我が家の家族安否確認も大変だった。娘がイギリスにおり、インターネットで市民文化会館の壊れた様子が写ったそう。我が家は会館の前だから、「会館があればほど壊れては家も何も流れただろう」と盛岡のいとこ、はとこに電話をかけ、妹にかけ、妹が甥、子どもに声かけ、インターネットに名前をあげて探したらしい。妹の息子が嫁の実家を訪ねて、私が無事だとわかり、それから何とかイギリスまで伝達したようだ。

ラジオもあるが、広範囲の情報ばかりで宮古市の情報が聞きたいのに入らない。不安。どこかのお父さんが「あーもう、宮古はひどい。向町なんか本当に歩く所がない。家が道路に来るし、車や船は来るし、全然歩く所がない。」と話していた。眼科のお医者さんも亡くなったという噂に驚き、翌日回った医療団に聞いたら、先生は元気ですと言われ解消。情報の混乱。市役所の放送も壊れ情報が入らない。新聞社が新聞を20部くらい持ってきてくれて、皆でむさぼり読んだ。あれは、ありがたかった。その後は、避難所と自宅を往復して片付け。皆さん本当に働いた。ボランティアもありがたい。感謝。

千年に一度の大地震だというので、千年前はどうなっていたのか。友人から資料がきた。鴨長明の方丈記にも大地震の記述があり、鎌倉時代

の間までに 200 年、400 年おきに大きな地震が来ているそうだ。昭和 8 年の大津波を祈念した慰霊の歌を紹介された。小学校の時歌ったという。

慰霊の歌「亡霊は千尋の海に 鎮もりて榮えゆく代の 柱たるらむ」
復興の歌「大津波くぐりて めげぬ雄心もて いざ追い進み
参い上らまし 参い上らまし」

津波はてんでんこで逃げる。まずは、自分で逃げる。45号線越える津波はないものだと思っていたが、間違いだった。

私は俳句を一つ詠んだ「鎮魂の海昇りくる盆の月」すごくきれいな月だった、今年は。



「乗っとがん！」

(大通 60代 女性)

大通の店で仕事中に地震。大津波警報だというので、3階にいた母を1階まで降ろした。妹は孫を保育所から連れ帰り、中は怖いので友人らと6人で外に座って様子を見ていた。ここは防災無線が全くゼロの状態でも聞こえなかった。消防車も走ったらしいが、ここは通らなかった。緊迫感や津波っていうのは、一切わからなかった。

妹に「末広町でもシャッター閉め始めてるよ！」と言われ、母たちを先に宮古小学校に行かせた。妹は孫をおんぶして、私が4枚目のシャッターを閉めようと棒をかけた時、「逃げろ！」という異様な声がした。振り返ると、消防の分団のはっぴをきた30代後半ぐらいの男性がバイクで来てくれて、ピタッと前に止まった。妹が子どもを背負っていたので「乗っとがん！」と言ってくださりお願いした。私はシャッターをバンと下ろすと同時に走った。

外に出たらセントラルホテル熊安まで水が来ていた。水が生きている感じがした。宮古小学校に向かい、ケーキ屋さんの角を曲がり寿司屋さんのところに行ったら、真っ黒な水が山口川すれすれで足がすくんだ。

寿司屋さんから橋を渡り間もなく、母が腰を抜かして道路の真ん中に座っているのが見えた。そこをバイクに乗せられ通り過ぎた妹は「お願いです、あの年寄りの方を乗せてください」とバイクを降りて自分で走った。皆に手伝ってもらって母を乗せた。後はもうそれぞれ宮古小学校へ。

私は水が店に入ったのが頭から離れず、3回は振り返ったと思う。今だに怒られるが、わが子を残してきたような思いで辛くて一目散に逃げられなかった。プールの陰に母が座っているのが見えた。学校まで頑張ろうとしたが、母は動けない。角の知り合いに頼んで、体育館までおんぶしてもらった。あー良かったと思ったら、「宮小に水がきた！」という声。もう体育館の中が騒ぎ始めて、皆が上へ上へと。「校舎の3階に逃げてください！」と言われたが、「もう無理だ、私たちはもういいな」と思った。皆が3階に逃げて舞台が空いたので、そこまで母を抱えて行った。「もしここまで水が来て皆一緒にだめだとしてもいいよね」と、そこまで思った。

校庭の向こう側から水が入ってきたが、もう祈る気持ちだった。「止ま

れー！止まれー！」という感じ。やっと半分ぐらいで止まって、これで助かったと思った。

次は寒さしのぎ。妹は、舞台の下にマットレスがあるのを覚えていたので、1歳ぐらいの子と90歳ぐらいのおばあさんを連れた若いお母さんと、皆で一緒に1枚ずつマットを敷き、暗幕のところで風をしのいだ。毛布は順番に並んでもらえるものではなく、ワーッと人が殺到してもらえなかった。年寄りと子供の分だけでもと、1枚ずつ取った。あとから3枚ぐらいもらえた。

朝になったらいっぱいの人だった。後から聞いたら、逃げ遅れて2階3階に残っていた人達が、水が引けた後小学校に避難してきたようだ。携帯も通じない。ワンセグなどで少し情報がわかった。

防災無線は異常な音がいい。普通の放送ではなく、危機感を感じるようなサイレンが欲しいと思った。いち早く逃げた人達は、状況がわからないため、後から来る人達が異様な顔に見えたという。「どうしたの」と同級生に言われ、「店に水が入った」と言うと「家も？」と聞いてくる。「多分無理だと思う。自分の店もかなり入っているんで、お宅はもっと入ってるし、かなり被害あると思うよ」と言うと、皆自分の家が心配になり、朝方に行って初めて状況がわかった。中には、「毛布とか着替えを取りに行ってくるね」と気軽に小学校を出て、初めて悲惨な状況を見た人もいた。

隣に住む女性はいつも午後出かけるため、いないと思って声をかけなかったが、その日は家にいたらしく、私がシャッターを閉めたので店に来たら、店先で水が入ってきたらしい。家の中に水が来たので2階に上がるしかなかったそうだ。その後、悲鳴と、「助けて」という声。静かになったと思ったら浮いていたという。それを残った人たちは見ている。逃げた我々より恐怖感はずごかったと思う。だから、語れないというのは分かる。

それを聞いたのは、3ヵ月たってからだった。毎朝、一緒に片づけをしているのに誰もそういう話はせず、無事の確認だけで後は片づけるのに必死だった。店も再開出来るとは考えられず、正直辞めようと思った。

3日目には近内の自宅で電気水道が使えるようになったので帰った。そこからは、徒歩で店に通い、3時になると帰るという生活。宮古駅の西と東では別世界。毎朝店に着くとショックだった。5月連休までは片

づけに専念した。連休明けにお客さんが頻繁に顔を見せてくれるようになり、そういう人の支えや「待ってるよ」という言葉で5月の中旬すぎから、復興オープンへ向かう方向になった。

そうでなければウツになっていたかもしれない。お店をやっていた人達は商売をやって元気になった。夫もみるみる元気になった。本当に自分達は恵まれていると、感謝しなくてはいけない。

被災者だから言えることは、「甘えちゃいけない」「形が壊れた人だけでなく、色々な形で皆が被災者だ」ということ。自分達だけが被災者だと思うのは、私は間違いだと思う。「あれしてもらってない、これしてもらってない」という方もいるけど、「このぐらいしてもらったじゃない」と思う。私は、ありがたいと思っている。

自分達の家族を犠牲にしている人達はいっぱいいると思うけど、そっちを優先できない人もいる。優先できる方はそれだけ恵まれている。お互いに助け合うこと。わがままはいけないとは言わないが、やってもらうのに甘えてはいけない。感謝の気持ちだけは忘れてはいけないと思う。

ここは町の中なので、津波は来ないものだと思っていた。来ても、「20 cmが 50 cmぐらいになって」というぐらいの感覚。津波があんなに生きていたようなものと思わなかった。ほんとに水がそこまで来るのを見るまでは、警戒していなかった。危機感がなく、「ここも避難するの？」と言う感じだった。



「高い所で止まっていれば・・・」

(上村 60代 女性)

大船渡の帰り、国道45号線を夫と2人で走行中に地震。カーラジオで地震の警報音が鳴った。平田に降りる長いトンネルの南側で国道の脇に寄せた。そこは高い峠だったので、そこにいれば車が流されることもなかったが、「家がどうなったか、被害があったのではないか、早く家に帰りたい」とそればかり頭にあって、走り出してしまった。本当はそこで黙って避難してれば、こんな経験をしなくてもよかっただろうとそこをまず反省している。

「大津波警報」とラジオで聞きながら、今から行く道路で低い所はどこかと考えていた。走るうちに、ラジオで1回目の波が来たと言っていた。高い所で止まればよかったのだが、その時はとにかく家に帰らなきゃともう無我夢中だった。

釜石観音様が見え、その時はまだ信号も動いていたと思う。橋の上で前の車が止まって海を見ていた。そのとき潮が引いていたらしく、真っ黒だった。水が見えずに、海の底が見えていた。鶉の住川の橋にさしかかり海を見たら、ずっと遠くにすごい煙か何かが見えて、「あれが津波かな、どうする？」となった。

渡り切った所で、山に人がいっぱい逃げているのが見えたので車を降り、バッグと薄いコートを持って駆け登った。川をさかのぼってきた波は本当に地獄。家が三陸道の橋にぶつかり壊れる音、「ガガガー、ガガガー」っていう音は忘れられない。スローモーションを見ているような感じだった。私の車は1度上に流され、引き波で橋の下にきた。

避難所は、釜石トンネルを出てすぐの元小学校の体育館。隣にきたおばあさんの家は鶉の住で、ご主人と手をつないで逃げたが波にさらわれ手を離してしまったという。自分は大事な物を風呂敷包みで首に結わえていたため、包みが浮いて自分も顔が水の上に出たのでそこを消防団の方に助けられたそう。夫の手を離してしまったことをものすごく悔やんで悔やんで、声のかけようもなかった。

2泊お世話になり、その後甲子小学校に避難。携帯も何も通じない。宮古に連絡したいが、災害伝言ダイヤルも全然通じない。小学校には、ストーブ、毛布1枚なく、とても寒かった。鶉の住小学校の児童も15人程来ていた。体育の長いマットに並んで寝て、先生が新聞紙やダンボー

ルをかけていた。恐怖と寒さで身体が震えて、後から思うと低体温症だったのかもしれない。

怖いなど思ったのは、一つの紙コップを洗わずに使いまわしたこと。あちこちで咳は聞こえるし、ここにいたら大変だなと思い、一晩お世話になって次の日は何とかタクシーに乗ることが出来た。

遠野でも携帯は通じなかった。国道 107 号線の北上が見える峠をこえたら携帯が突然ピッとなった。横浜の娘に通じ、「ネットなどで見ると宮古は壊滅状態、治安状態が悪いので帰るな」と言われた。それで滝沢にいる妹の家に行くと、真っ赤な尿が出てびっくりした。コップの使いまわしが嫌で全然水分を取らなかった。後から調べたら水分を取らないと尿路感染など病気になるらしい。その一歩手前だったのかと思った。

でも本当に反省している。命さえあれば家なんかどうでもいい。命があればその後何とかなる。もっと、自然の恐ろしさをちゃんと心にとめておかなければならない。町内会では2月末に防災教室をやっていたが、ある方は「線路より山手の上村までは来ないよね、ここまできたら宮古の町全滅だもんね」ってそんな話をした。私も「そうだよね」と言ったが、そう話した方の家のすぐ隣の庭まで波が来ている。あの地震の2日前にも地震があったが、たいしたことなかったのが油断があった。

今になって毎日、反省している。「お前はあの時あそこを通った、あと何分かずれていたら命がなかった。あそこで車を置かずに先へ進んでいたら、命がなかった」と。ちょっと時間があくと、思い出して自分はなんてことをしたんだと落ち込んでしまう。状況がつかみにくいので、やはり車を置いて逃げるのが良い。いつも車で出歩いているので、カイロや衣類をつめたリュックを常に車に積むようにした。



「近くに避難したので、倒れている人を発見できた」

(磯鷄石崎 70代 男性)

仕事の後、磯鷄松原公園近くの自宅に帰って地震。揺れがおさまった頃、車で義理の妹を愛宕の自宅に送るため築地の電話局裏で降ろし、すぐ自宅に戻った。その時は停電で信号が無く、分団などに止められることもなくどんどん進めた。嫁と妻は、磯鷄小学校に歩いて逃げた。津波の時は、車で逃げるなというので、自分は国道 45 号線の石屋さんの裏、石崎鼻の山に歩いて逃げた。隣のおばあさんと孫、3人で話をしながら歩いて逃げたのでそれだけ時間に余裕があった。

山に上がったら、バリバリバリと音がするので海を見た。それは車や船が浮かんでぶつかり、ガラスがわれたりする音で、それがまさか堤防を越えてくるとは思わなかった。まだ車が道路をどんどん通っていて、普通なら自分も降りて津波が来ていると騒ぐが、その時は間がぬけていたのか気がつかず、国道を車が激しく通るのをだまって見ていた。

ところが水位が上がり、堤防をちゃぷんと越えた。これで終わりかと思ったら第1波が盛り上がった所に第2波が続けざまに来て、何倍にもなって堤防をガバーッと越えた。水が引いた後は、道路にがれき。磯鷄の家が無くなっていると聞いたが信じられず、自宅に行こうと思ったが途中で行けなくなった。

そのまま戻り、磯鷄小学校に避難しようと歩いたところ、陸橋の辺りで「人がいた！」と言われ、行ってみると車のガラスとへこんだ屋根に挟まって出られなくなっている女性がいた。「おい！おい！」と呼んだが声が出ないので、一緒にいた男性とがれきの角材で車の屋根を広げて、ようやく引っ張り出した。とても重たかったが立たせたら歩きだした。

するとまた別の所で「人がいましたよ！」と。ガードレールと港湾の大きな機械の背より高いタイヤの間におばあさんが挟まっていた。避難しようとしたが、遅かったようだ。早く逃げようと近所の人が手をつないでまわろうとしたら、波に追いつかれ、手を離れたようだ。タイヤに挟まったおばあさんは、呼んで騒いでも真っ白くなってうんともすんとも言わない。これはだめかなと思ったが、それでも男性3人で角材でようやく引っ張り上げた。

携帯も使えず連絡できないので、無線で連絡が取れるかと思い、10分

団まで歩いた。ようやく旅館のある交差点まで来たが、水が深くて行けずに戻った。その間におばあさんは、近所で手当を受け、運良く連絡が取れて病院に搬送されたようだ。

町内も亡くなった人が全部で7名。当日3名、後日4名。一緒に逃げていて手を離してしまった人達が後から悩んでいる。無意識のうちに手を離してしまうのだろう。自分だけが助かった、悪いことしたなという気持ちがいっまでもあるようだ。

一番悔やまれるのが、「3 m以上の津波が来ます」と言ってもらえれば良かったということ。地震直後、テレビで「3 mの津波」と言ったのが悪かった。堤防を3 mの波が越えるわけないと思っけてしまい、逃げない人もいた。逃げ遅れ、波に追いつかれた人が亡くなり、逃げないで家が残った人は助かった。

自宅は、大規模半壊。小学校の体育館も寒かった。毛布は八木沢団地の倉庫に200枚保管してあったものが、5人に1枚くらいだったか。夜は、パンを少しずつ皆でわけあった。下の方の家に井戸水があるので、若い人達が水をもらいに行き、沸かしてお湯を配給した。食べ物、水はないし、ストーブも2台だけ。その後自分は体調をくずし、上村地区の修導場に移動した。片付けをしながら4日間世話になり自宅に帰った。

訓練の時は、「石崎の人は、近くの少し小高い土地か石崎鼻に行きなさい」と決めていた。磯鷄小学校は遠いので、安全な場所に集まってから行動しましょうと。1年前のチリ地震では逃げなかった。本当は地震の大きさに感じて逃げなければならない。逃げる時に非常食、水を持っていくべきだったと思う。またすぐ、戻って来れるものと思っけてしまった。

3 mというのがあったので、隣近所の手前上逃げた。磯鷄の方は、道路がいっぱいあるので、車でもすぐに避難できたようだ。遅く逃げた人達が波に追いつかれたが、近くに避難した人達がいたので、倒れている人の発見につながったのも確かだ。町中はすぐ歩けば山があるから、歩いて逃げた方が良く思う。逃げるのが一番。

「持ち出しリュックに順位を決めて」

(鯨ヶ崎 80代 男性)

散髪が1時間早く終わり鯨ヶ崎に帰宅10分後に地震。自宅は海岸に近いので、大工さんをお願いし家がつぶれない状態に補強はしてあった。でも、絶対にこの家は流されると思っていた。ドンと揺れが来たものだから、静まったらすぐ勝手口の戸を開け、妻と2人でまずガス栓を2か所止めた。私は、電気のブレーカーを落とした。その間5分ぐらいかかったと思う。

その後、走らなくても間に合うぞと歩いたが、避難場所に行ったら後からどっと波がきた。それを見てまた神社の山の上に上がり、どんどんどんどん街が動いていく光景を見て、もう息がつけなかった。その後は、一晩そこにいて寒かった。

警報音は聞こえるが、内容がわからない。その後の情報に気をつけろとか注意と言う風に聞こえたが、すぐに逃げなきゃならないよと自分で逃げた。

1年に1回、3月の訓練にも参加していた。持ち出し用品も、最低限のものはいつも枕元に置いていた。病院の保険証など、証明書類は全部入れていた。大きなリュックサックもあったが、これをしょって歩いたら大変だなとやめた。リュックの順位を2つか3つに決めて、軽いのには印鑑とか証明書のようなものを入れていた。

自宅から避難所までは、私達の足で10分くらい。鯨ヶ崎小学校は避難所になってない。熊野神社が避難所だ。訓練の時も校庭に集まる方がいたが、やはり危なかった。

被災してからの話だが、自分の身分証明や実際お金を使うためのものは持って逃げたので良かったと思う。津波警報が出たら理由はいらぬ、とりあえず逃げるのが大事。明治の時は、ほとんどの地域がやられている。昭和8年の時は、その半分くらい。実際来ているのでとりあえず逃げた。訓練に出るのが非常に大事だと思った。

強烈に感じたのは、時間。ちょっと違えば学校は大変だった。児童たちは帰りの時間で、少し遅ければ、皆町を歩いていた。とにかく結論は逃げる！道路から見えるのだから、海が。

「堤防があって流れるわけない」

(田老 60代 女性)

田老の自宅で地震。私はグループホームの管理人をしているので、「逃げる」というより、地震直後に車でそちらに向かった。波は来ない所にある施設だったが、私が行かなければ入所者がご飯を食べられないということがすぐ頭に浮かび、取る物もとらず車ですぐに向かった。

高台にある施設から見たら、海が全部泥の色、危機一髪だった。ご飯を作るにもガス、電気がない。そこは年の知恵だと思うが、とにかくその辺から松ぼっくりや木を集め、レンガを組んでかまどを作り鍋で米を炊いた。水は停電でも貯水槽があったのでバケツで汲み上げた。灯りが無いので自分達でろうそくも作り、「ただ灯すよりは」と夢あかりに入れたりもした。それが何日も続き、サバイバルのようだった。

他の職員は一旦家に帰ったが、車のガソリンがなく誰も戻ってこられなかった。私1人で20日以上対応した。ちょうどその日の午前中に米30キロと食材も仕入れていたので良かったが、冷凍庫も溶けるため、次々作って食べさせるしかなかった。電気の復旧は1週間以上かかった。

施設では知的、精神に障害のある大人を預かっていたので津波という非常事態がわからず、ちゃんと3食ご飯を食べたがる。箸と茶碗を持って待っている。そうするとストレスで私が避難所に行きたくなった。どうしても宮古に行きたいと言うので、現場を見せなければこの子たちにはわからないと思い連れて行った。歩いてトンネルを越え、往復2時間ぐらいかかったが、それから食べたい飲みたいが少し自粛された。言うことを聞かないという言葉は悪いが、でもあの場合はこの現状を見せて良かったんだなと思った。体調をくずす暇もなく、自分の家を見に行きたくても行けなかった。

地震の後、何も持たずにささやかな通帳と保険の証書をリュックに入れていたのをかかえて車で逃げた。向かいのおばあちゃんがうろうろしていたが、「私はご飯炊きに行かなきゃならないから行くからね」と言って最後に別れ、そのおばあちゃんは流されてしまった。まわりも20人ぐらい亡くなった。

私は、そういう仕事があって助かった。でなければ一緒だったから。あの子達にご飯をという頭があったから、私の命があったんだと思う。こんな津波が来るとは思わなかった。一晩は帰れないぐらいで、堤防が

あるから絶対波はこない。あの堤防があって流れるわけないと、津波なんて全然考えなかった。訓練があっても、参加する人は街の方で、ちょっと端の方は逃げない。誰も「津波はこない、あの防波堤に守られている」という意識があった。だめだね、警報も関係なく逃げないと。



「近いとこ、近いとこに下がっていく」

(緑ヶ丘 60代 女性)

自宅は被災していないが、田老の妹家族3人全員行方不明。壊れた堤防近くに住んでいた。日頃のあの人たちは、堤防があるから絶対津波は大丈夫だという感覚だった。普段私も、あの堤防を散歩したり、港公園で犬を遊ばせたりと頻繁に田老には行っていた。

球場のあたりにだんだん家が建つようになってきたのを見て、怖くないのかなとは思っていた。よく怖くなく家があるもんだなと思い、妹に話すと「堤防があるから大丈夫さ」と言っていた。

ほんとに堤防はなんだったのか。ない方が良かったような気もする。それに、海が見えるように堤防は高くなくていいと思う。本当は高台に住めばいいのだろうが。人が作ったものはあてにならない。

どこかの議員が、「前に同じ被害を受けているのに、何で同じ所に家を建てるのか」と言い、批判されたことがあったが、私も実際に明治三陸大津波の本を見たら、全く繰り返しだった。今回の津波と同じで驚いた。

人と自然は繰り返す。結局時代が変わるから、これはもう永遠に繰り返すんだなと思った。住む所を絶対上にしないと、人はやっぱり近いとこ、近いとこに下がって行くのだと思う。

避難訓練は「とにかく高い所に逃げろ」でいい。その一言での訓練をとにかくやっておいた方がいい。田老の人たちは堤防を信頼していたのだろう。2日前の地震の時も、私と妹は海岸を散歩していて気がつかなかった。「地震があったので注意しなさい」とか何とか放送があったが、誰も出てこなかったし、私達も「えー何？」と言う感じだった。過去の津波の高さよりも低い堤防だった。

自分だけの考えだが、また来る津波は、今度のよりまた高い津波だと思う。次々と高くなっているような感じだから。

「津波と人の怖さ」

(磯鷄沖 40代 女性)

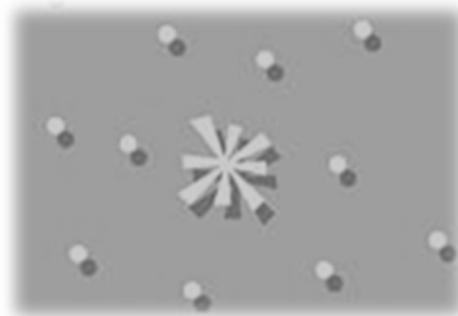
自宅で地震。2日前の揺れでも、なんだかおかしい地震だなとは思っていた。3月11日の揺れ方はただ事ではないと思い、あの時間に普通じゃないなと思い、近くのスーパーなどに様子を見に行っただが、誰も動いてないので安心して戻った。まだ揺れがひどいので子どもを磯鷄小学校に迎えに行かなければと、かばんに通帳と財布だけ入れて、1日くらいですぐに戻れるという感覚で行った。

小学校は避難所になっていて、人がどんどん集まり、波がすごいと言っていて、これからどうなるんだろうという不安な様子だった。電気も食べ物も無く、からだの不自由なお年寄りもいたが、寒いまま為す術もなく、トイレはつまる、ノロウィルスの子はいるという状況だった。

夜になり毛布が届いたが来ると我先にと皆がワーンと行くので、お年寄りとか子どもがいる人は立ち上がれなかった。子ども達には、先生が「飴玉一個あげるよ」とくださった。寒くて寒くて、津波も怖かったが、人の怖さもあった。物にワーンと寄って、むしり取ってすばやい。これはちょっと地獄だと思った。子どもがショックで食べなくなったので、津波被害のない実家に移った。

学校の手配が良くて、その日のうちに避難者名簿を壁に貼って、出て行く人は書き残していくことで安否確認になった。

自宅には、水や丸太も入った。すごい泥で、最初行って見た時は、このまま逃げて帰りたいとさえ思った。



「夜中 2 時からガソリン待ち」

(館合 70代 女性)

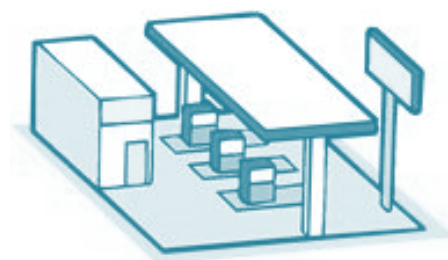
館合の自宅で地震。すごい揺れで頼りは放送だった。同じ町内でも低い所、数件は床下浸水。一石山と山口小学校が避難所になっているので、ものすごい人がわんさと集まってきた。その様子から「これはすごい津波なんだな」と感じた。

お年寄りたちが上の駐車場に連れられてきて、車いすの方などを休ませた。一時的だったが、騒然とした数時間。その後、小学校や親戚などを頼り皆いなくなった。

職場にいた息子は、犬を助けに戻った時に津軽石の栄通りにある自宅が流された。嫁の実家に行き、孫とお母さんと 3 人で一晩いて、次の日ボートで助けられたそう。ノイローゼのようになっていたものの、13日の早朝にやっと帰って来た。

片づけるにも泥で数日間はいれなかったそう。それでも、持ってこられるものは持ってきて家で洗った。

避難所にも行っていたが、どこに行くにもガソリンがないので、夜中 2 時頃から夫と並んだ。山口団地入口のスタンドから、駅前まで並んだ。どこのスタンドも長い行列になったようだ。息子と夫が交代で並んだが、1 回目は 2000 円だけしか売らなかった。次の時は、3000 円分だった。



「2 回目の尋常じゃない揺れ」

(鍬ヶ崎 50代 女性)

鍬ヶ崎上町自宅で地震。最初の揺れでは、どうしようかなと駐車場の車まで行ったり来たりしながら迷っていた。2 回目の揺れで、もうこれは避難しないとまずいなと思いついて外に出て、近所の皆さんと一緒に近くの山のお寺さんに向かった。

山の電信柱が、バリバリ音をたてながら倒れてくるので怖かった。上まで登る途中で後を振り向いたらもう波が来ていて、海岸から 10m ぐらいも波が入って来たところで、家がもうバリバリバリーっと傾いたり壊れたりしていた。それを見て強い恐怖感を覚えた。

お寺には、3 晩くらいいた。消防の方たちが、愛宕の山を越えておにぎりを持ってきてくれた。集まった人たちも近所の人達なので顔もわかるし、お年寄りも皆さんでいたわり合った。その後は、休暇村などにそれぞれ避難した。

逃げようとは思ったけど、あんなに大きな波が来るとは予想もつかなかった。普段から避難はしていた。あの時は尋常ではない揺れだった。5 分 10 分違えば本当にどうなっていたかわからない状態だった。

普段から避難時に持ち出す物の準備や、たとえ津波が来なくても逃げるのが重要だと思う。警報は鳴っていたとは思いますが、内容まではわからない。やはり 2 回目の揺れが、いつもの地震の感覚ではない、尋常ではないのが引っかかったので逃げようと思った。



「後日部屋から避難リュックが」

(鉾ヶ崎 50代 女性)

避難所の常安寺別院に上がる途中に自宅がある。ハザードマップを作った時は「15mの津波が来たら、私の家を目指して逃げなさいよ」と決めていたので、まず家には来ないという思いがあった。申し訳ないが、避難訓練の時も早朝、皆さん上がって行くところだと思いながら寝ていた方だった。

地震の時は小山田の職場にいて、処理場の高い所までバスで避難した。一晩過ごした人もあるが、私は鉾ヶ崎の自宅が心配で、歩いて常安寺から中里団地に降りたが、そこから下には降りられなかった。夏保峠の道を知らず、嫁に来て30年、1回も通った事が無かった。懐中電灯もなく、佐原の実家に一晩泊った。

翌朝、息子たちと一緒に初めて峠の山道を降りて見た時に、道路の前に家があったので、これは何だろうと思った。小山田の山の上では全然情報が無く、ラジオは聞こえるが、宮古市の情報が流れなかった。次の日から、職場の利用者の安否確認のため、毎日往復2時間ぐらいかけて職場に通った。4月初めまで、電気も水道もなかったなので、生まれて初めて鍋でご飯を炊いた。

自宅のある地区は全戸避難対象だったが、自宅も含めて被災を免れた沢の上の20軒ほどは、自己責任で残った。

5月になってから娘が部屋を片付けていたら、避難リュックが出てきた。何年前に用意したのか分からないが、水を入れる袋から暖をとるアルミの毛布、非常用ビスケット、携帯トイレ、乾電池、ろうそくなど一式入っていた。結局役立てることが出来なかったが、普段から備えていても、肝心な時に思い出さなかった。



「油断、ここまで来るわけない」

(磯鷄石崎 80代 男性)

磯鷄公民館で卓球中に地震。すぐに自宅に戻り、2階に上がったならテレビが倒れていた。公民館を片づけなければと思い、自転車で戻ったが、もう鍵がかかっていた。また自宅に戻ったのが15時頃。

1階に座っていると、娘達が「さあ逃げるべし!」と車1台を置いて先に避難した。私だけは「来るわけない、ここが来るくらいなら宮古はダメになる」とそんな事ばかり考えていた。油断して。

何となく外が騒がしいなと思い、車庫の車を見に行った時シャッターがやぶれてきた。バーンと音がして、これは大変と思い逃げようとしたが、すぐ波で転ばされ一回潜った。しょっぱいなーと思いながら何とか立つことが出来た。玄関に水がバーとあふれ出していたので、戸を開けた方が壊れないと思い開けようとしたが、鍵をはずすので精いっぱいだった。玄関が階段のすぐそばだったので、2階に上がることが出来た。

あの時立っていたから今の自分があると思う。座っていたら、年寄りだしすぐ立てないので、そのまま終わりだった。2階で着替え、下を見たら、ダーっと水が引いていた。家に丸太がぶつかってドーン、ドーンと音がする。磯鷄小学校に行こうと思ったが、前の公園に丸太がたくさん流れて通れない。国道から上村を回った。先に逃げていた娘達は、「暗くなっても来ない来ない」と心配していたようだ。学校に行ったらもう皆喜んでくれた。

やっぱり油断だ。今まで来たことがないから、大きい津波が来るわけないと思っていた。若い人達の方が、逃げるという気持ちがあったようだ。私達の年の方が、来るわけないと油断してしまった。

15日間ぐらい学校にいた。防災無線は聞こえなかった。いつも聞こえないから聞こうともしない。津波が来るとも聞かなかった。1階の車庫は天井まで浸水。

同じ卓球仲間は、家に戻り何ともないので植木を直していたら、津波で道路に流され、石崎から来た波と営林署側から来た波とがぶつかった勢いで止まった所にある家の2階の上がり口に立って助かったそうだ。逃げないで、流れ着いた先にある2階にいた、その家人もびっくりしたという。

訓練には参加していたが、磯鷄小学校は少し遠くて間に合わない場合があるので、まず石崎のトンネルの上に逃げるようにしていた。

命があったから、今こんな話を出来る。水に飲まれた時は、不思議とあまりパニックにはならず、とっさに玄関を開けようと思った。家の下が車庫で鉄骨なのも良かったと思うが、まず逃げろ！だ。



「訓練で役割分担を決めていた」

(赤前 70代 男性)

漁村センターにたまたま寄った時に地震。そこは、赤前保育所建て替えのため、一時的に保育所が借りていた。鉄骨でも柱や屋根がすごい揺れで、内から外からガラスがみんな落ちてくる勢いだった。子ども達も泣き叫んでいた。

新しい保育所が完成し、移る矢先の出来事だったので、年長さんは、卒園式の練習で新しい保育所に行っていた。関係者なども皆そっちに行っていたので、漁村センターの方には、赤ちゃんをおんぶした先生方が数人で子どもは50人以上いた。全員で70名ぐらい。私も驚き、子どもをかかえて外に出した。先生方は赤ちゃんを背負っているの、自由がきかない。外で保育所のバスが来るまで待ち、一人残らず乗せて「赤前小学校に避難しなさい」と指示を出した。

小学校には既に500人以上いた。近くの会社の社員さん達も避難していたようだ。重茂方面に行く方もここに避難していた。人が多いので、完成していた保育所にすぐ移った。保育所には親御さんなどが迎えに来たが、渡さずに「一緒にいなさい」と帰さなかった。

まだ津波は来ていなかったが、そのうちに第1波が金浜の方にぶつかった。外に出ると波がものすごい勢いで来ていた。まだ家にいる人や、今までのように浜を見に行った人もいたようだった。

私は、防災関係で避難所の指揮をすることになった。赤前小学校に防災一式を保管しているの、校長先生方に動いていただいた。そのうち、私の自宅にまで津波が押し寄せたと聞き「まさか」と思ったが、本当に波が入っていた。家では、ここまでは来ないからと常日頃言っていた。妻は濡れて、泳いで山に上がったそう。

赤前では、農家もほとんど流され、残った方に食料をお願いして3日間つないだ。最初は大きいおにぎりだったが、無くなってくると小さくなって、腹減ったと言われてもどうしようもない。500人分、3食なので大変。でも、学校給食の釜を壊さずに残してあったので、本当に助かった。5, 6年生の子どもも、おにぎり配りなど手伝ってくれた。児童生徒も保育所も皆無事で良かった。

避難所運営は、先生や町内で協力して決めた。ちょうど3月3日の避難訓練で事前に部落で集まり、連絡員、炊事救護班などの役割分担をし

ており、訓練が役にたった。震災時はその方たちが責任を持って動いてくれた。なぜか訓練にも力が入っていたような気がする。

毎年、3月11日を訓練の日にする方が良いのではないか。日頃、家庭で津波は恐ろしいよと伝え、参加してほしい。私は、親に「明治29年の津波もここには上がらなかったから、ここに家を建てなさい」と言われて建てた。家族にも日頃そう言っていたが、「まさか自宅まで被災するとは」とびっくりした。

遺体が上がると、一番部落の人を覚えている自分が確認に行っていた。赤前では24, 5人亡くなっている。一番心配したのは、若いお母さんと赤ちゃん。お母さんは、工業高校で先に見つかったが、1歳になる赤ちゃんが見つからず、何とか早く見つけてほしかった。数日後、ガレキを片づける重機の人が、津軽石中学校の畑の土の割れ目から発見した。思い出すと涙が出るが、本当に見つかって良かった。見つからない人は本当にかわいそうだ。

自然にはかなわない。最低限の防波堤と「地震が来たら逃げる!」の一言。聞いてみると色々なドラマがあった。家が残っても、工業高校付近の人達は、夜に「助けてくれ」と叫び声が聞こえたそうだ。校庭の水が引かず、助けたくても何も出来ない。そのうちに声が聞こえなくなる。命を落とす時の切ない声を聞いた人は、耳に残っているという。流された人達だけでなく、皆同じ思いはある。

1年前のチリ地震の警報では、避難しなかった。運動公園も残すなら避難ビルを作った方がよい。たかが水と思うがすごかった。

避難道路も赤前白浜、重茂と共通点があるので、ちゃんとしたものを作ってほしい。

「津波という感覚がなかった」

(赤前 女性)

赤前の自宅で地震。娘と二人でいた。普段から、「家に来るくらいなら、

前の道路から下は全部流されてしまうから大丈夫だ」と言われ、それを信じて、皆が避難しても我が家は大丈夫だと思っていた。私は、内陸出身なので津波を知らない。そういう感覚がなかった。

地震の時は、常に用意している大事なものを持って、娘と一緒に近くの山に行った。今回も地震ばかりを気にして、揺れがおさまればまた家に戻り、また揺れたら大事な物を持って山に上がった。そして何回目か2階に上がる途中で、下の部屋から「助けて！ばあちゃん」と呼ぶ娘の声が聞こえた。いつもと違うなと思い、3段目まで降りたらもう津波が入って階段を上ってきた。

玄関前に大事なものを置いていたのを思い出し、降りたら、水はもう胸ぐらいまであった。大事な物も、もう流された後だった。後を振り向けばわかったかもしれないが、音は全くしなかった。

娘は、外に出ていたらしい。ちょうど戸袋のような大きな戸が流れてきて、それに上がった。自動車は流れてクルクル回り川に落ちたが、娘が乗った板は、ブランコの間ひっかかって助かった。渦をまいているので、何もできなかった。

避難所では寒くて、毛布もないので、隣から借りた。すごい人数で、トイレに行くにも人の頭を踏むようだった。皆さんが3日間は本当に大変だった。

警報は、3 mの津波が来るということは聞こえたが、後の警報は聞こえなかった。



「従業員の対応が早かった」

(藤原 男性)

小山田のスーパーで買い物中に地震。店の中は、すぐに停電にはならず、さほど大変ではなかった。揺れもそんなに感じなくて、警報もわからないが、従業員の方々の対応が早かった。皆でトンネルに近い高台の社員駐車場まで避難した。

何も見えず、17時頃までそこにいた。藤原の自宅に帰ろうと土手に行ったら、向こうからぞろぞろいっぱい人が来た。缶詰会社の人達だった。更に進むと橋が見えた。鉄橋が見えずに何で宮古橋が見えるのかなと思ったら、半分鉄橋がなかった。携帯が繋がった時に電話したら、自宅は無事だと聞いて安心したが、自宅に行く道を沢山の車がふさいでいた。

前日の3月10日は、浄土ヶ浜のホテルで演芸会があり、駅前で解散したのがちょうど地震の時間だった。今も、あの演芸会がもし11日だったらどうなっていたらと思う。



「後のダンプが動いて抜け出せた」

(花原市 男性)

車で商業高校の近くの坂を走行中に地震。高浜の知人を訪ねた帰りだった。車がエンジンの故障のように揺れたので、驚いて止まった。前の車も止まった。道路は揺れがひどかった。反対車線の車もかなり揺れた。海を見ると商業高校のヨットが沖にいたので、こんな地震の時にと思い心配していた。

すると後のダンプが走りだしたので、一旦避けた。ダンプが動いたので一回バックして、その列から抜け、宮古に向かって小山田のトンネルを通り、自宅がある花原市に走った。信号は動いていたのでそのまま走った。

自宅に着いたら兄弟が2夫婦来ており、いつも来ないので何が起きたかと聞いたら、津波だと言われた。私は全く知らずに、地震が怖くて帰って来たのだった。

兄弟が逃げる時、館合の橋から水が来ているのを見てびっくりしたそう。兄弟の家は藤原で、一番水が高く上がる場所なので、車でいち早く逃げたようだ。運転者は、金浜の温泉施設に行っていて、裸になった時に地震に遭い、驚いて藤原に戻り家族を乗せて私の家に逃げてきたそう。家は流れたが、家族4人は助かった。

私も高浜に長くいたら、高浜街道や藤の川などで津波に遭っていたかもしれない。



「越えていたら大変だった」

(宮町 男性)

宮町に帰宅してお茶を飲んでいたら地震が起きた。他を聞くと、家具の中の物が投げ出された状態の人がけっこういたが、私の家は揺れた時も茶碗も落ちずに大丈夫だった。家は八幡様に近い方だが、その土地の質によるのだろうか。

津波警報が出たので、私は「どれ堤防に行って見てくるか」と言った。そんなに大きな津波が来ると思ってないから。すると妻に「行ったらさらわれて、あの世に行ってしまうよ！」と言われたので見に行かずに、その足で八幡様に行った。後で聞いたら、堤防に何人か見物の人が行っていたらしい。波が越えなかったからいいが、越えていたら大変だった。

落ち着いても2波、3波があると思い、八幡様には3時間ぐらいいた。思ったほど人は来ていなかった。



「港の入口でぐるぐる渦を巻いた」

(崎山 70代 男性)

女遊戸の自宅で地震。私は消防団員なので、揺れが落ち着いたら水門を閉めに行こうと消防ポンプ車のシャッターを開けて、運転手が来るのを待っていたがなかなか来なかった。やっと来て、水門を閉めている時に沖を見ると、真っ黒い水が宿漁港の入口でぐるぐる渦を巻いていた。

だんだんに渦を巻く潮の流れが速くなってきたので、運転手に「早く来い!」と叫び、ポンプ車に乗りこんだ。上に上がって見ようと車で行ったら、女遊戸部落の人達はまだ家の方にいた。「高い方にあがれー! あがれー! 津波が来たぞー!」と叫んだ。

姉ヶ崎の島ががぼっと見えなくなった。これでは危ないなと思った。そして栽培漁業センターの水タンクが、少ししか見えない状態になった。土か水か泥かわからないが。あれが夜なら誰も助からないと思う。

自宅も無いなと思い泣き叫んだ。隣の家には車いすと寝たきりの方がいらっしゃるので、家にいた娘はそこを訪ね、職場にいるお父さんを呼びに行ったらしい。

私が17歳になる時、堤防が出来た。それを越えて来るとは思わなかった。昭和36年には女遊戸が火事にやられた。その時は家を建て直したが、今度はもう建てられないなと思っている。

2日前の地震の時も水門に行っていた。女遊戸部落は、年寄りがいても被害が無くて良かった。自治会が皆車に乗せて高台に連れて行った。訓練はあまりやっていないが、普段から「こういう人がいる」とわかっている所以、助け合うことが出来た。女遊戸は比較的浜から遠いので、少し時間もあつたと思う。時間が短いと、とても間に合わない。それに自分の家は、後がすぐ山なので上がる事が出来たが、夜だと周りが見えなくてどこに行ったら良いか分からないだろうと思う。

「すぐ足元を波が通った」

(崎山 50代 男性)

海の上で養殖昆布の間引き中に地震。ラジオも聞いていた。船が縦にバタバタと大きく揺れた。海から崖山が見事に崩れるのが見えた。自宅も年数が経っているのに、崩れているのではと先にそっちを心配した。

地震がおさまってから宿漁港の岸壁に戻ると何人かが船を上げようとしていた。引き上げる機械が停電で動かないが、知らないで降りて来る人がいたので、途中から戻って「電気が切れてだめだから」と教えに行った。教えに行かなければ、何人か流されたと思う。浜から自宅までは1分ぐらい。おばあさんも妻も外に出ていた。おばあさんは浜まで散歩に行ったが、地震が来たので途中で戻ってきたい。

帰宅して7分ぐらいか、大きな音がした。これで完全に津波が来たなと思った。その前にパトカーが「津波が来たから、逃げろ」と通ったのは聞こえた。そしたら妙な音がした。妻達に車に乗れと言ったが、おばあさんが家の前の山に走ってしまった。まさかと思い、自分もついて行った。そしたらいくらか経たないうちに波が来た。山が急な坂なのでおばあさんが落ちてきてはと思い後を行ったら、自分のすぐ足元を波が通った。何とか山に上がって下を見ると、低い方を川なりに波が上がって来ていた。屋根ばかり流れて来たが、引く時にそれらが自宅の前を通り、ぶつかって自宅が斜めになった。

自分も家が心配でなければ、まだ養殖作業をしていたと思う。ラジオは聞いていたが、海はそんなでもないし、大きな津波が来ると心配もしないので。ただ、見事に山の岩がくずれていたのに、自宅の後の石垣が崩れたなと思い戻った。

波が引けてから、家の中で水をかぶって、がれきの中にいる人を助けた。がれきを取るにも、ああいう時には力が出るものだ。3人で引っ張って片づけて、腰を痛めて動けないでいるのを、その人の息子が中から背負ってきた。車いすで動けない、おじいさんも助けた。

だんだん暗くなり、人を探すため大声を出すと、がれきの中から声が出た。すっかりパイプやゴミの中に入れて、そばには壊れた船もあったが引っ張り出した。よくあのくらいの船も動くものだなどと、後から考えるが。その人のケガが一番ひどかった。太ももに大きな材料が刺さったらしい。本人から聞いたら、津波の時は家の中に入れて水をかぶり、流れて

橋のガードレールに引っ掛かったようだ。

私の家族も地震だけで津波が来ると思っていなかった。あの時間はみんな働きに行っているから、うちの浜で家に残っていた人はおらず、その日、海に出ていたのは自分一人だった。

船を上げようと、浜に戻って亡くなった人も多い。みんな商売道具の船が気になって海岸に行く。何年か前の 50 cm ぐらいの津波も、皆見に行っていた。一旦避難しても、やっぱり皆さんが降りて行くと知らないふりもしてられないし、行って手伝うと皆降りて行く。船は命の次に大事だから。



「どういう家庭か役所はわからない」

(崎山 60代 男性)

自宅は崎山小学校の近く。自治会役員なので崎山地区の避難所で色々な方のお話を聞いた。役所の方々は交代で来るし、避難者がどういう家庭なのか分からないので、地域の人が一人ぐらいいないと避難所の運営はスムーズにいかない。すんなりいくことばかりではなかったが、私は、どこの人だかだいたいわかっているのも、何とかやっていた。

当初は200人近い人だった。2週間後には110人ぐらいになった。大沢、女遊戸、松月から全部避難してきた。ライフラインの回復が遅く、水が最後だった。兵庫、広島からも給水車が来た。6月末には、40人近くまで減った。その間役所の相談など、毎晩橋渡しをした。

宮古市では災害に対する備えが少なく、毛布も遅かった。私達で支援物資のお願いに地区をまわると、米から何からどんどん集まった。その前は消防団も米を出した。消防の方で3日、おにぎりを出した。そのうち避難者が自治会のようなものを作り、当番を決めて日替わりでやった。

小学校がシェルターになっているが、何もない。ただ避難するだけ。あそこに毛布とか、ある程度そろえておけば良い。腐らないものだけでも置くべき。夏なら良いが、せっかく避難しても冬は寒くて大変だ。指定場所には、食べ物以外は何とか揃える方法がないのかなと思う。

防災放送で「2m、4mの波」とか言って、その後何も言わなくなったのも良くなかった。この辺は最初の情報がその程度でぴたっと消えたので、まさかあのような津波が来るとは思いもしなかった。情報網が切れたのが一番悪かった。

いずれ、今回の震災はすごい教訓だった。



「昔は大きなサイレンがあった」

(崎山 70代 男性)

崎山の自宅では被害はなかったが、雪を溶かして水にした。妻はリュックで、水汲みに行った。3, 4日してから大阪吹田市の給水車が来て、自衛隊も来るようになって助かった。

吹田市の方が1軒1軒まわって水をくれた日の午後、水道が通った。私もガソリンを詰めるのに朝4時ごろ起きて並んで、やっと12ℓ。直接被害には遭わなかったけど、別な面で苦労した。

停電で放送がすぐダメになった。戦時中の話で申し訳ないが、空襲警報、警戒警報など昔は放送が無かった。全てサイレン。今の公民館の上の八紘台に大きなサイレンがあって、すごい音だった。放送が無くても、あの音で皆外へ出た。津波でも何でも、あれでやればいいのか。防災無線は、下の方の家には良く聞こえない。サイレンだけは聞こえるので、無線も必要だけれどサイレンももう一回考えてみてはどうか。



「命拾いした」

(重茂 80代 男性)

重茂の自宅で地震。家内と二人でいた。私は中にいたが、家内は驚いて外に飛び出した。普段はひざが痛いと言っているが、体力が無くても外に逃げていた。落ち着いてから中に入ったが、私は、避難ということが頭になかった。ひょいと「あっ津波！」と思ったのは、15分ぐらいたってから。

普段、「津波が来るから下に下がるなよ」と言っていたので、自分が見に行っても様にならないと思った。しばらく考えて、「そうだ人のいない所を見に行こう」と思った。神社があるので、そっと車で降りて行った。誰にも会わなかったと思う。行ったら途中の窪んだ所まで波が来ているので、こんな所まで来たんだなど。でも落ち着いたらろうとそこも越えて進んだ。更に下のこぶの所はすっかり波が洗っていた。先に進んで大丈夫かなと思ったが、海を眺めたら波は落ち着いていた。水は濁って潮が速く、まだがれきは来ていなかった。それから、そっと家に戻ったら停電で大変だと気付いた。

自宅は高台なので、そのまま一晩過ごした。2日目に改めて見に行くと思定外だった。私はチリ、十勝沖地震にも遭遇している。昔から「津波の時は下がるなよ」と言われていた。後から、女房に「俺は命拾いしたな」と話した。もし津波だとすぐ頭に浮かべば、ビデオカメラを持って写しに行っていたと思う。本当は記録に撮りたかったが、夢中になると周りが見えなくなるので、行けば終わりだったと思う。



「無人の軽トラックが風で動いた」

(音部 70代 男性)

私も70を超えているが、あんな波は見たことがない。浜に下がったら、親戚も上がって来たので自宅に戻り、長靴を履いたまま自分の部屋の金庫を車に積んだ。次は、買ったばかりの軽トラックを取りに行った。おっかあは、腰を抜かして動けないので車に乗せて高台に置いた。3回目は、後1台残っていた車を取りに行った。

大きな津波が来る時は風が来るというが、その時、誰も乗らない軽トラックが風に飛ばされて自分の前を通ったので、これは大変だと思った。波が4、50分たたないうちに来ている。私は45分だと思っている。その間に、よく何回も往復したと思う。貴重品はかばんに入れるなどいつも訓練はしていた。

その晩は児童館に泊まった。12日から地区センターにお世話になり、6月11日に仮設に入った。日頃の訓練は大事だ。

一番力強いと思ったのは、分団長が「分団のお金を全部持ってくるから」と地元商店の米50俵ほどを買い、これで腹いっぱい食べてくれと確保してくれたこと。

地区センターに3ヶ月、仮設に4ヶ月入り、高台に家を新築した。家を建てほっとしているが、「仮設にいた30名、皆が建てないうちは私も同じ部落に置いてほしい」と総会で言った。部落として皆が復興するまで、年寄りだが、力になれることはしようと思っている。

防災無線はいつも聞こえない。同じ地区の方で、私が3回目に車を取りに戻って高台に引き返す時、家に戻った二人がいた。それでやられた。戻るのはだめ。二人には、「津波が来るから逃げなさい」と言ったが、家に戻ってしまった。4、5分の差だった。たとえ注意報でも、出たら高い所に逃げる。戻るのはだめだ。



「屋根に乗って流されていった」

(笹見内 70代 男性)

家の外で地震。中にいた息子達は、騒いで外に出て来た。私も瓦が落ちたと思った。地震がおさまってから、後の浜を見ると、小さい船が波で浮かんでいた。「あっ津波が来たぞ！」と言うと、すぐに息子がオートバイで浜に下がったが、たちまち戻ってきた。その後、ものすごい大きな音がしたので見たら、水が下の方の家まで押し寄せていた。家々が流れて、引き波で沖に持っていかれた。

遠くの方で屋根に1人、若者か子どもらしき人が乗って沖の方に流れていくのが見えたが、どうすることも出来ない。するとその人は、下の岸に近づいた時に上手にぼんと飛び移り助かったので安堵した。

あの辺は全部水門に吸い込まれて、沖に流れて行った。浜では、車に乗った人は流されたようだ。息子はオートバイだったので、すぐにUターンして逃げた。私の50m下の部落は流れたが、自宅は大丈夫だった。



「捜す時は呼びかけて」

(重茂 70代 女性)

重茂の自宅で地震。これはだめだと思い、まずおばあさんをトラックに乗せて高台のプレハブまで連れていった。私も戻らなければ良かったのだが、家で夫とガスの元栓を締め、何を持ったかわからないまま、車に乗ったところで第1波がきた。

波で車が竹やぶに押された。夫は運転席のドアを蹴破った。私が車の上になると夫はまだ下にいて、がれきにまかれたのか、そのままわからない。次の波がすぐきたのかもわからない。その時は、家は皆あった。いつの間にか私も車の下に入り、下の家や車庫などと一緒に上の方まで流されたようだ。

3時15分から30分まで「あんつあん！父さん！」と助けを求めて大声を出した。あきらめたところに、上の家の人がおーいおーいと呼びかけてくれ、私は「ここだ！」と騒いだ。その後、消防の人達に車の下から助け出してもらい、公民館まで運んでもらった。

救急車も来ないので、近所の息子さんに送られ、その日のうちに宮古病院に入ることが出来た。その後、ヘリコプターで花巻に行き、さらに飛行機で秋田まで行き、脳神経センターに1週間いた。そして赤十字病院に3ヶ月ぐらい、リハビリセンターには50日通った。

7月29日にやっと家に戻ることが出来た。その間に、おばあさんは亡くなった。お父さんも。部落の皆さんには面倒を見ていただき、本当にありがたかった。ただ、息子達は、私が5ヶ月も病院にいたし、こんなに元気になると思わず、仮設住宅に申し込まなかったもので、物資などが頂けずに困った。今は、新しい家が建つので空き家を借りて住んでいる。

あきらめかけた時に捜す声が聞こえて助かったのも、やはり捜すときは見るだけでなく、呼びかけないと。



「静かに波は上がって来た」

(重茂 60代 女性)

夫と孫、おじいさんと居た重茂の自宅で地震。すごい地震なので、戸を開け放した。お父さんは浜を見に行くと言うので、「だめだめ！」と止めたが、車で降りて行ってしまった。船を高い所に結びつけていたらしい。

夫がなんの気なしに海を見ると、静かに波が来たそうだ。そのために「津波だ、おかしいな」と驚いて、作業をやめて車で上がって来たという。そのうちに、大津波警報が聞こえた。息子は、たまたま沖に行っていたので、慌ててすぐ携帯電話にかけたが通じない。心配したが、津波が来るちょっと前に上がって来た。

学校に行っていた孫を迎えに行くと、子ども達も上で泣いたりしていた。孫を連れて行こうとしたら、「1人欠けると子ども達も不安になるので、まだ待ってほしい」と言われた。

避難の人達がいるので、手伝おうと公民館に行った。皆が色々と手伝い、女性部、防火クラブの持ち寄りで炊き出しをした。そのうちに、消防の人達が通行できるようになって買い出しもしてくれた。



「蓄熱暖房で2日間」

(重茂小学校)

地震が来るとマニュアルに従い外に全員避難して、揺れがおさまるのを待った。現在は、アンテナをつけて改善したが、当時は校舎内にいると警報などは聞こえず、ラジオも入らなかった。携帯電話で調べようとすると最初は通じたが、10分後ぐらいから通じなくなった。テレビをつけても停電ですぐ消えた。

子ども達は、着の身着のままなので、そのまま外に置くわけにもいかず、移動先を考えた。避難所の古い体育館があるが老朽化しているし、新しい体育館は、14日の検査結果が出るまではまだ使えないというので、校舎の1階会議室に戻った。30分以上過ぎていた。しばらくしたら、津波が来て家が流されたというお母さんが来て、そこで初めて津波を知った。

学校より高い所の家族が引き取りに来たが、あまりにも大きい地震なので「もう一回大きな余震がくるかもしれない、様子を見て少し待ってください。皆今晚学校に泊めさせたい」とお願いし、理解していただいた。家が流された家族はもちろん、それ以外の子どもや心配な保護者の方などが泊った。

停電になっても学校は蓄熱暖房があるので、余熱で2日間暖かかった。その情報が伝わると、公民館から移る方もあって最大200名ぐらいの避難者がいた。

11日の夕食は、笹見内会館と公民館の両方から味噌汁やおにぎりが届き、子ども達は食べ物之苦労はなかった。食べる子は2個も食べられたし、サンマとワカメ、汁物も出たので大変ありがたかった。寒いとなれば、旅館から毛布がたくさん届いた。発電機もすぐ届き、電燈もついた。消防団と地域の方に、ご飯にしても何にしても助けられた。日曜日には子ども達全員が他へ移った。地域の方も「学校が始まるから」と他にまた戻ってくださって、学校の事を本当に考えてくれてありがたかった。

ただ、本当に警報などが聞こえなかった。情報も限られたものしかないのが現状。通じるようになって初めて知った。携帯テレビやラジオで情報を得た。

子ども達は津波を見ていないが、映像で見ているので同じ。アンケートでは、心配な子が1割ぐらいいる。夜眠れない、怖い夢を見るなど。

心のサポート事業などの情報や制度を生かしながら、向き合う時期を見ている。津波と向き合うことも必要だ。

学校でも、これからは「子ども達を返さない」と方針が変わった。3月3日に津波指導も行う。来年から3月11日が防災の日、訓練の日になる。一つの区切りと考えている。

学校で困ったのは、新しい調理器具はガスではなく電気なので、大量の調理が出来ないこと。ほかの小学校のように家庭科室を開放して調理できない。



「避難所運営は誰が」

(重茂 男性)

市役所で地震。そのまま一晩泊まった。テレビで放映されたように波が堤防を越えるのを6階から見ていた。真っ黒い津波で、私の車も流された。警報は聞こえたが、水門の下を車が鉋ヶ崎に向かって走っていた。車の中だと全然聞こえないし、堤防で波は見えない。

携帯電話が繋がらず自宅に連絡出来なかったが、夜の10時頃に1回だけ息子と連絡が取れた。携帯電話が壊れたのが一番困った。市役所の地下に発電機や灯油があったが、全て津波に流されて何も使えなかったそう。ストーブも灯油を節約するため、とても寒く一晩中震えた。議会中だったため、ほとんどの議員と市役所職員、全部で200人ぐらいたと思う。全員が6階に上がり、一晩そこで過ごした。あんなに朝を待ったことはなかった。

翌日、妹の家に行き、人から車を借りて重茂に向かった。津軽石の駒形橋を通って藤畑を抜け、赤前小学校裏に出た。重茂の里も流れたようだと言われたが、目で見てないので心配だった。自宅に戻ると妻も元気で安心したが、里に下がりお墓を過ぎたら松が無いのでびっくりした。何であの重茂の高い堤防を越えたのかと。あれを見て現実に戻った。大変な事だと実感した。

最初は重茂漁協が対策本部を設けた。その後、それぞれの地区に任せることになった。ここは自治会が中心になったが、がれきの置き場所や仮設住宅の場所、避難所の発電機や物資調達も誰がやるのかわからなかった。重茂小学校の新体育館が検査前で使えず、仕方なく校舎や公民館を使った。発電機や炊き出しの費用など、支援物資が来るまでは大変だった。

本来、行政がやるのではという点まで、自治会に押しつけられたような感じになった。今後のために、避難所の最初の物資など自治会か、漁協か、市がやるのか、これからマニュアルをきちんと決めなければならないと思った。

小学校を避難所として開放していただき、先生方もお世話をしていただきました。最後には、仮設住宅の場所も小学校にお願いして、校長先生にも快く引き受けて頂き有難かった。それも歴史に残していただきたい。

「毛布を 100 枚あげていた」

(重茂 男性)

防災会長をしているので、すぐ避難所に向かった。避難所でははじめ、近所の方々で対応していた。待機中の消防団の分も準備をするので、12日に支所に集まり相談した。

まず食べる事が先なので、母さん達を 5, 6 人グループでお願いしようと、館地区の 1 軒 1 軒に協力をお願いした。炊き出しは女性にまかせ、漁協の対策本部などを何度も往復した。発電機を運び、ドラム缶を切って魚を焼いた。

漁協にサンマの提供を頼み、業者がストックしている鮭も頼んだ。さんまを重茂全体に配りたいが、電話が通じないので公民館までバイクで伝えた。女性達の炊き出し当番は、その日から5月の初めぐらいまで続いたと思う。

以前から、「まさか堤防を越えることはないだろう」という思いがあり、里地区の漁協集荷所に発電機や毛布などを置いていた。しかし、その漁協集荷所も被災してしまった。平成21年1月28日のチリ津波警報の時、避難するとしたら小学校か公民館だと思い、とりあえず車で 100 枚毛布を公民館に運んでいた。全部あげれば良かったが、そのお陰で 100 枚の毛布を使うことが出来た。

今回の津波で集荷所に残した 300 枚程度は、全て流した。それでも皆さんが声をかければすぐ来てくれたし、自主的に協力体制をとってくれて助かった。

私の家は明治の津波で被災したため、高台に移った。今回流された人たちが、高台へと模索しているが、その方が良いと思う。昔は、役場も里にあったらしいが、明治の津波で流れたという。



「まさかあんなに来るとは」

(重茂 男性)

西町のスーパーで車に乗ろうとした時地震。これは、間違いなく津波が来ると思った。経験したわけではないが昭和8年の津波程度かなと、まさかあんなに来るとは思っていなかった。

家に帰ろうと急いで走ったが、信号が消えて渋滞した。藤の川の辺りではまだ津波が来ていないが、湾内が渦を巻いていた。ゆったり走り、高浜小学校近くの左の空き地で津波を眺めようとした。見ている間もなく、大きい波が来た。私は慌てて車で逃げた。

その時、造船所に大きな津波が上がった。空地にも来ると思い右往左往していると、向かいの小高い畑から消防の人達が「こっちに来い！」と合図したので、軽トラックで上がった。その時に小学校にも波が上がり、造船所の2階も流れてきた。波は小学校にそのまま上がり、目の前の45号線には来なかった。重茂の自宅に行かなければと思ったが、しばらく眺めるしかなかった。波が水門を壊して越えるのを見てすごいと思った。

夕方に道路を見たらどこもふさがって行けそうにないし、電話も通じない。公衆電話もダメ。老人福祉センターには、人が集まっていた。避難したは良いが、ストーブも食べ物もない。その時、田老にも津波が堤防を越えたという話を聞いた。その日は車に泊った。朝に燃料を満タンにしていたので良かったが、一晩で半分ぐらい燃料が無くなった。夜には、火事だという山田の方向も見えた。山田に行った帰りにどこにも行けずにここに来たという人や、ここに来る前に流された人達もいたようだ。

私が取った行動は良かったのか。もう少し早く進んでいれば、赤前で流されたかもしれない。



「8 mの堤防があるので越えると思わなかった」

(重茂 女性)

夫と田野畑までドライブした帰り、月山の辺りで乗車中に地震。夫が「車がおかしい、パンクしたのかな」と言い止まった。そこで6 mの津波と放送を聞いた。そのうちにぷつんと切れて何も聞こえなくなった。そんなに津波は来るわけないだろうと家に向かった。6 mと言われても、8 mの堤防があるので、絶対来るとは思わなかった。

館に来て別ほ慌ただしいということも無いので、下に降りて自宅まで行った。1階はきれいで、そんなに地震はたいしたことないと思ったが、2階では物がぐちゃぐちゃ落ちていたので、かきわけながらバックを持ち出した。トラックと車があるので1人ずつ乗って、小学校か交流センターで会おうと逃げた。

私は、保健推進員などもしているので、ふと頭に「この地区に、1人暮らしが2人、障害を持つ方が3人いるので声をかけなければ」と浮かんだ。1人暮らしの方の家で呼び掛けていると、地域の人達に「神社に上がれっ！」と言われたので車を漁協集荷場に置いて歩いて上がった。

何分たったか、誰かがガス臭いという。そのうちに音がするので、山でも鳴っているのか何なのだろうと思っていると、目の前から波がきた。堤防を越えて、集荷場から山の木をバリバリ倒して。皆さん、ただ言葉もなく、何だろうという感じで見ている。黒い波がここまで来るかもしれないと思っても逃げる所もないので恐怖感を覚えた。家が流れてくるのが信じられなかった。

上に避難しようと歩きだし、その晩は、公民館のホールにぎゅうぎゅう詰めに入った。皆さんのお陰で1ヵ月くらい炊き出ししてもらい、後は自分達で班を決めて暮らした。今は、仮設住宅に入っている。



「3m、次は 6m と言ってぷっつり切れた」

(重茂 女性)

近所の友人宅で地震。いつもと違う大きな揺れで外に出た。自宅に戻ると電話が鳴っていた。盛岡の孫が「ばあちゃん、家は大丈夫？」と連絡してくれた。盛岡もかなり揺れたようだ。周辺がざわざわして、防災無線が「大津波、大津波、3m」次は「6m」と言ってぷっつり切れた。

その後、皆さんがどんどん避難してくるのを見ると私も動揺してしまった。お墓の下まで津波がきたらしい、音部も里も流されたと聞いて、まさかとは思ったが避難して来るので本当なのかなと思った。何をしていたか分からず、津波の被害にあった方には声をかけるのもかけられない様な状態で皆と一緒にいた。

しばらくして、私が先に買物に行った。カレールーやシチューなど保存出来るものがあったので、後の人のことを考え、少し残して買って来た。米 10 キロや豆腐、ワカメなど持ち寄って作った。その夜は何もなかったが、お漬物と味噌汁とご飯だけ出した。

すぐに明日の心配をしたが、消防さんもお米を貰って歩いてくれたし、皆さんの寄付で繋いでいるうちに支援物資や、漁協からもサンマや鮭が届いたので、汁物や焼きものにした。どこの会社からかメカブも届いた。ガスは使えたし、水道も止まらなかった。宮古地区の方では水道も危ないというので気をつけて使ったが、最後まで大丈夫だった。

皆さん、養殖のために発電機を持っているので、暖房も大丈夫だった。重茂では灯油もガソリンも、漁協の繋がり業者が秋田のスタンドから特別に持って来てくださったようだ。沿岸では一番早かったらしい。当日の晩はテレビも見ていた。



「揺れでパニックに」

(重茂 女性)

自宅で地震。海に一番近い家に、インフルエンザで休んでいた孫といった。嫁に「おばあちゃん、孫を頼むよ」と言われて留守番していたが、地震、津波ですっかり忘れてしまった。すごい揺れで自分だけ外に出て、家を眺めていると、もともと孫が出てきたのを見て、はじめて孫を思い出した。

腰が抜けて立てず孫に頼って中に入ると、消防に「津波が来るから早く逃げろ！」と言われた。本当に来るのかと聞いたら、「3mの津波が来るから早く逃げるように」と言われた。3mと聞いて後は忘れてしまい、堤防があるから大丈夫、来ないなと思っていた。すると嫁も帰ってきて、「逃げないで、いつまで何しているの！」と言われ、はっと気づいて、それからバッグを持って逃げた。

後で開けたら要らないものばかりで、大事なものは眼鏡だけ。財布を持って逃げようとしたが、違うことを考えているうちに財布を忘れ、また探しても見つからず。すっかり頭がおかしくなった。

消防のお陰で助かった。訓練があるといつも参加していた。家では「もし津波が来たら、めいめいで走ってでも神様に逃げるんだぞ！」と決めていた。

11日は、一旦、神社に逃げたが、皆さんが堤防を越えないと言うので、もしかしたら津波は来ないかもと考えていた。皆が騒ぐので走ったら、もう波が来ていた。「あっ、この波ならここまで来るな、堤防を越えたな」と分かった。あの波の量。口を開けたような波が見えて。泡だらけ。水は茶色だった。

私は揺れでパニックになり、腰が抜けてしまった。まさか、こんな大きな津波が来るとは全然思わなかった。のんびりし過ぎていた。

訓練には下の方の家だけ参加していた。他は、危機意識が少なかったようだ。私も危なく追いつかれただろう。

「大きな^{さくね}作根が見えていた」

(重茂 女性)

自宅地震。夫と友達 3 人といた。急にガタガタとすごい揺れで、私以外は皆外に出た。私は、揺れが治まるかなと中にいたが、皆が「早く出てきて！」と叫んでいた。これは大きい地震だから津波は来るなど思い、避難場所に上がって来た。

さらに上に上がり、海を見ようとしたら、「今大船渡に 6 m の津波が来た」と聞いた。25～30 分しかたっていない。カラマツを真っ白にダーツと斜めに越えて、何だろうと思ったらそれが津波。一面海が真っ白。他の人に「何か白いよ、観光船が来ているんじゃない？」と言った。それが大きな津波だった。沖に、普段は海面に見えるか見えないかの作根がある。その時は大きな作根が見えていた。「作根ってあんなに大きいんだね」と話した。

里からきた方は「館地区は揺れないね。里地区はすごい揺れで箆筒も抜け落ちてきて、これでは危ないなと思い上がって来た」と言っていた。その方は津波を見て、「は一、家はだめだ、これで終わりだな」とがっかりしていた。

カラマツの向こうから茶色の養殖棚が、湾の方から沖に流れて行った。ちょうどワカメがとれる時期だった。大きい船が 5、6 槽沖に出て行って、継子島ままこじまに並んだ。地震から 30 分ぐらいしかたっていない。夕方に下のお墓の所で見ると、里地区が一面沼。水が溜まって。屋根が見えたのは、漁協集荷場だけ。炊き出しは、近所の人達が持ち寄った。ろうそくや海苔、昆布の煮つけ、炭も一俵、靴下も持って来た。濡れて避難した人はいなかった。

* 作根 = 普段は海面上に見えない岩礁



「ダンボール 106 箱」

(重茂 80代 男性)

自宅の台所で新聞を読んでいる時に地震。これは大変だと思い、逃げ場は全部開けて、柱の下に寄った。落ち着いた頃外に避難した。

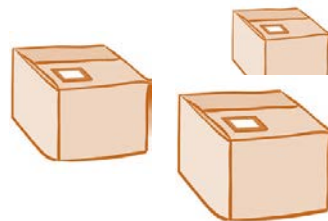
自宅付近は高台なので、訓練をしてもいつも集まらない。でも、この日は、だんだん人が集まって来た。山の上で津波を見た。その後、炊き出しが始まった。後から他の地域の様子を聞くと、最初の晩はピンポン玉ぐらいのおにぎりで、翌朝はおかゆだったそうだ。それからみれば、重茂の方は、おにぎりをちゃんと作ったようなので良かったと思う。公民館に何回か顔を出して、皆さんが早くもっと元気になればいいなと思っていた。

12日には、腹帯の知人に届け物があったので、山をまわり荷竹の方に出て花輪から行った。帰りに千徳の花輪橋を渡って帰ろうと思ったら、直線道路のコンビニで「ストップ」と言われた。「花輪橋まで行きたい」と言ったが、「ここからバックして帰れ」と言われたので、花原市の橋を通り花輪に出て帰った。

息子から電話が入っていたので、電波が入る所をあちこち探して5日目に教習所近くで繋がった。向こうの会社では、「家族と連絡がつくまでは、出勤しなくてもいいから探せ」と言われたそうだ。

数日後には、宅急便でダンボール箱が106個届いた。息子のスキー仲間からだった。各漁協にお願いして避難所を回り、手紙を読みながら配布した。スキーウェアだった。寒い時だったので皆さん喜んでくれた。

スキー仲間の1年に1回の飲み会などで、宮古のワカメがおいしいから買って送ったりして、そんなこんなから繋がりが出来たようだ。ありがたいなと思った。沖縄から北海道と仲間が広がって、神奈川、埼玉、湘南、蔵王といろいろ。天然ワカメの収穫をテレビで見て、「私達も買って応援します」と言ってくれて本当にありがたかった。



【夜中に巨大津波？】

(重茂)

《Aさん》

今回の津波で、「夜中に2波、3波よりも大きな津波が来たのではないか」という話がある。これは、重茂の里で被災した方の話によると、津波直後の夕方に見た時は、流れて来た屋根が自宅の小屋の側まで来ていたらしい。しかし、翌朝見に行ったところ、前日の様子とは異なり、屋根と小屋とがくっついていたそうだ。また、別の方の話によれば、自宅前に流れ着いていたはずのがれきが、翌朝には家の中にまであったそうだ。

宮古の磯鷄の人達に喋っても、そんなものは来ていないのではと言われた。私は、夜中の何時か分からないが、大きな津波がもう一回来ていると思う。いつか、それを誰か調べる人があったら提言してほしい。

《Bさん》

ある方は、逃げる時に津波がきて、「確かに自分の家があるな」と確信してきたのに、翌朝行ったら流れて何も無くなっていたので、夜中に大きな津波が来たのかなと言っていた。白浜でも残っていた船が、朝行ったらなかったと聞いた。

《Cさん》

地震から10時間以上たって、また津波が来たということになる。自宅の辺りでもあたり前にあったものを次の日ひっぱりに行ったら、壊れていたと聞いた。



「慎重に行動すれば・・・」

(田老 60代 男性)

宮古岩泉国道 40 号線の乙茂橋で地震。2 t ダンプで荷物を積んでいた
ので、パンクかなと思った。後の窓を開けて見ていたら、一時停止の標
識や電信柱がすごく揺れているので、地震だったのかと思った。

乙茂の野球場を通り、小本に行くと信号機は消えていたような気がす
る。車は、スムーズに走っていた。田老の道の駅に来たら、県北バスが
4 台くらい、乗用車もいた。まだ相互に車も通っていた。いつもだと警
報の時は、地震の退避場所で交通整理の方が車を止める。宮城地震の時
は、松月の所で家に帰るのを止められたことがあった。

止まっている車もないから、スムーズに田老の町中に入った。その後、
小林の県北停留所の辺りで私は流されている。新聞店の前。防波堤の始
点から、波が上がって、「あ！津波だ」と初めてわかった。U ターンしよ
うと思ったが、船同様に流された。角の床屋にぶつかって初めてガラス
が落ちた。すっかり割れないので、出るときに頭をごつごつぶつけた。
半分以上身体をつき出したまま 100m ぐらい流され、民家と民家の間に
挟まり、どうにか浮き上がった。運転席には、まだ水は入っていなかつ
た。

田老の人は避難して、町中にはいなかった。もがいている時に、初め
て津波の情報を耳にした。寒いので走行中は窓も開けてないし、ガラス
が割れたので放送が聞こえた。ラジオはかけてなかった。とにかく早く
帰ろうと思っていたが、それが仇になった。誰も車を止めなかったし、
対向車も来ているので何とも思わなかった。

何とか車を出て、屋根伝いに逃げた。40 分ぐらいで水がみるみる引け
た。その晩は皆、田老第一小学校に避難したようだ。

私は、会社まで報告しなければと思い、知人のタクシーに送ってもら
った。途中、弟の家で衣類を借りて、情報を聞きながら、山口にある会
社に着いたのが、夜の 10 時過ぎ。

部落でも炊き出しを始めた。部落の人達も体育館に避難したようだ。
自宅は停電だったが、水道、ガスは大丈夫だった。電気も二日目で点い
た。一番早かったらしい。13 日に点いた。後日、その時着ていた上着を
洗ったら、綿に水を含むので 20 キロぐらいあった。

結果論だが、自分も少し慎重に行動すれば良かったなと思う。津波が全然頭になかったし、来る時間も早かったような気がする。放送は何も聞こえない。ガラスが割れて、這い出す時に初めて聞いた。車のラジオをつければ良かったが、とにかく早く帰ろうとしか思わなかった。

町中に人はいなかった。人を見たのは、屋根の上に上がった時。線路の上に、沢山の人がズラッと並んで海を見ていた。



手記「回想 あの日から」

(赤前 40代女性)

3月12日。ある方が、避難所となっていた私の職場の玄関に突然現れた。少し険しい顔で私に手招きをして呼び寄せると、「母さんが見つかったから、帰れ」開口一番こう切り出した。しかしながら、その言葉の意味を瞬時には理解できず、少しの間様々な思いを巡らせた。ようやく「えっ？それは生きてということですか？」と尋ねるのが精一杯であったが、その方は首を横に振った。それは、私の思考回路がやっと繋がって意味を理解できた瞬間であった。

11日の大きな揺れの後、「逃げて」と伝えるため母に電話した。「プープー」電話は繋がらなかった。別の誰かが電話して、逃げるように話してくれているのかも・・・と自分を納得させた。

1年前のチリ地震による大津波警報、さらに2日前にも大きな揺れが発生した。「近いうちに大きい津波がくるんじゃないか、怖い」過去の津波経験もあり、津波に対する恐怖心を抱いていた母は前日にもそう漏らしていた。だからこそ逃げていないはずはない・・・そう思い不安を掻き消して過ごした一晩であった。

信じ難い光景の中で対面した母の遺体は、地元の消防団の方々の手によって空き地に横たわり、近所の方がくださったピンク色の肌掛けをまとっていた。身体中が氷のように冷たかったが、泥の付着はあったものの大きな損傷がなかったのは幸いだった。多くの行方不明者がいる中で、見つかっただけ有り難いと心から思えた。

断水の中、見つけた水溜りすらも有り難くて、そこに浸したタオルで泥だらけの顔を拭いた。きれいなお湯で拭いてあげることもできず、心の中で「ごめんね」と詫びることしかできなかった自分がいる。

遺体安置所に移され、所定の手続きを経て棺に納めていただいたが、検死の際に着衣を全て外されるので、冷たい身体にまとっているのは、あのピンク色の肌掛け1枚である。大きなビニール袋に入れられ、頭下に置かれていた母の着衣。砂が入り込み海水を含んだうえ、検死のためハサミで切られたその様は、さらに悲しげに私の目に映った。安置所のフロアには、同じ光景が広がり、いたたまれない空気が漂った。

いよいよ、母との最後の別れ。「〇時からの火葬です」そう告げられたが、電話が通じない中で最後に会わせたい人達を直接迎えに行く時間はなかった。断れば次はいつの火葬になるかわからず、これ以上母を傷め

たくなかった。苦渋の決断であったが、私と高校生の娘とで見送ることを決めた。

着の身着のままの、たった2人。悲しくて申し訳なくて、惨めな気さえした。かつて経験したことがない、2人ぼっちの火葬であったが、まだ若そうなお坊さんが唱えてくださったお経が、とても切なくガラんとした空間と心に響いた。

津波から1週間程経った頃、夢を見た。母が灯油のポリタンクを提げて自宅付近をトボトボ歩いている。駆け寄った私が「何をしてるの？」と尋ねると、「ストーブに灯油がうまく入らなくて」と答えた。母の手からポリタンクを取り、地面に置いてストーブを見ると、それは津波でグチャグチャに壊れて到底使えるものではなかった。

「母は寒がっている」と思ったその瞬間、夢と現実の間で目が覚めた。視界の先にあったのは、避難所である体育館の天井・・・夢か現実か。翌日、夢で見た場所を通ると、正に赤い灯油タンクが泥の上にポツリと立っている。夢と同じ光景に胸がしめつけられ、何ともやりきれない気持ちになった。

復旧した自動販売機で温かいお茶を買い求め、供えることしかできない。冷たいまま裸で旅立たせてしまったことを思うと、心から有り難いと思っていたはずの早い発見も「せめて物がある時だったら」と、複雑な思いにかられた。

7月の納骨までに、何か持たせてあげたい。相談した葬儀屋さんは私の気持ちを十分に理解してくださり、畳んで骨壺に入れるようにと手作りの小さな白装束、袈裟、六文銭、雑穀などを揃えてくださった。友人は小さな小さな草履を作ってくれた。私はピンクの口紅を一本準備した。母への最後の贈り物であるその全てを壺に詰め、安堵の思いで蓋をした。

生まれ育ち、慣れ親しんだ風景は一変。ふとした風や香りで、懐かしい家族の日常が鮮明に思いだされることがある。

「迷惑ばかりかける」が口癖で、私に頼りきっていた母。頼られているとばかり思っていたが、実は私も頼っていたのだとこの頃気がついた。ビニール袋の着衣の中にはお守りが残されていて、当時は「守ってくれなかった」と恨めしく感じたが、今は「このお陰で早く見つけていただけたのか」と思えるようになり、私の手元にある。

あれから間もなく1年。白装束と草履を身につけ口紅をさした母は、そろそろ父の元に着いているだろうか。